

## 2 縄文時代晩期末～弥生時代前期土器の製作・使用状況

文様の系統などの型式編年的観点からは、縄文時代晩期末から弥生時代前期にかけて強い連続性（系統性）が見られ、この間に大きな変化はほとんど見られなかった。器種として蓋が出現するのが、縄文時代と弥生時代を分ける、ほとんど唯一の違いといって良い（他の地域では、遠賀川式系土器も）。それでは、その蓋はどのように使用されたのだろうか。土器の製作や使用の状況には、変化は認められるだろうか。十分な検討はできないが、これらの問題について少し考えてみたい。幸い、平成 16 年 12 月に所内の研修で、北陸学院短期大学の小林正史氏から、焼成時の黒斑、使用時のスス・コゲについて若干の指導を受けることができたので、黒斑、スス・コゲを中心に検討していきたい。第 537 図～第 573 図は、小林氏の指導を元に金子が作業員に指示して作成したものである。スス・コゲが認められる器種・器形のうち基本的に底まで残っている土器について作成した。僅かな時間の研修だけで理解が十分でないと思われるので、間違いが存在する可能性が高く（下の記載についても同様である）、御配慮いただければ幸いである。

### ①製 作

#### (1) 黒斑から見た焼成状況（第 537 図～第 573 図）

深鉢は、一般的な縄文土器と同様の黒斑を持つものがほとんどのものであり（小林ほか 1999、2003）、中に薪を差し込んで焼いているようだ。小型の鉢や浅鉢は、黒斑が残っていないものも多く、はっきりしない部分もあるが基本的に深鉢類に準じているようだ。また、縄文土器と弥生土器との間に違いはないようである。

蓋は、傘の外側に黒斑が付くことが多く、特に把手頂部からその底への付着が顕著である。傘の内面に付くものも比較的多く見られることから全部そうだとは言いつれないが、基本的には傘を下にして置き周囲に薪を立てかけて焼いているのではないだろうか。内面に見られるのは、途中で倒しているためか。内面に見られるのは小形に顕著なことから、小形の場合は必ずしも傘を下にして置いていないのかも知れない。

#### (2) その他

山王Ⅲ層式の精製土器に金雲母を多く含むことは、よく知られている（須藤 1983:p.5）。本遺跡の様子を見ると、青木畑式にも見られ、大洞 A' 式古にも僅かながら確認された（第 387 図 3602 など）。しかし、顕著になるのは山王Ⅲ層式からである。

色調も、山王Ⅲ層式は、焦げ茶色というか、土色帖で言えば黒褐色（7.5YR3/2）～暗褐色（7.5YR3/4）を呈しているのが特徴的である。それ以前の土器が、赤みというか「橙み」（7.5YR6/8）を呈するのに対し、その違いは比較的顕著である。

胎土や色調が、土器製作上においてどの程度の意味を持つのか、わからないが、山王Ⅲ層式期が一つの画期となっている可能性がある。これは、この時期に磨消縄文（単なる帯縄文でなく文様内に）が復活するという大きな変化が見られる点にも符合する。

しかし、色調と磨消縄文以外の変化については漸移的で、また縄文と弥生時代の境にも符合しているわけではない。

### ②使用状況－スス・コゲ－（第 537 図～第 573 図）

小林正史氏が、金附遺跡の北北西約 3km にある北上市九年橋遺跡の縄文時代晩期後半の土器について分析

したのと同様の傾向を示す。すなわち、「コゲが付かない土鍋は特小型にしかない点と、特大型でも高い比率で水面下にバンド状コゲが付く点が特徴です」(小林 1999:p.7)。「出土土器量が多い東北地方中部の縄文晩期では、浅鉢に炭化物が付く比率は低いです」(同 :p.45)。

弥生時代から新たに出現する蓋はどうだろうか。今回の調査では、文様を持つ装飾性の高い蓋は稀だが、第 573 図 1874 や 3677 は器形が顕著に異なり、壺用の蓋の可能性がある。第 238 図 1809 と第 243 図 1872 のような壺には口縁部に貫通孔が巡り、おそらく蓋とセットになるのだろうが、同じく貫通孔を持つ蓋は今回見つけれなかった。なお、第 103 図 208 を見ると、合わせ口土器棺墓で深鉢と組み合わせるのは高坏に非常に近い装飾蓋のようである。

これら以外の大部分は煮炊きに使われたものと思われる。基本的には傘と把手からなる形態がほとんどを占めるが、中には第 573 図 2106、3618 のようなやや異形のもの、さらには把手部を持たない第 573 図 2181 のようなものも存在する。

スス・コゲの付き方としては、口端に帯状に巡るものとはほぼ全体に及ぶものなどが見られるが、大きさなどで顕著なまとまりは読みとれない。しかし、第 568 図に示した大きさの一群は、中央に巡るということで、他の大きさのものに比べ、比較的統一性が見られる。これらは主として「かぶせ蓋」として使用され、他は主として「落とし蓋」として使用されたことを意味するのであろうか。

小林正史氏によれば、弥生土鍋における蓋は、「大半が落とし蓋」(小林 1999:p.47) とのことである。東北地方の中でも明らかに稲作が行われ米を炊いていたであろう、弥生時代中期の宮城県仙台市中在家南遺跡(仙台市教育委員会 1996)の蓋も、落とし蓋と考えている(p.50)。中在家遺跡の蓋は、榊形囲式のもので、金附遺跡の山王Ⅲ層式のものとは比べ、把手が退化して「つまみ」と呼ぶような状態になり、逆に傘の部分は発達している。この違いを、単に時期による型式変化によるものとすべきか、用途が異なるためと考えるべきか。

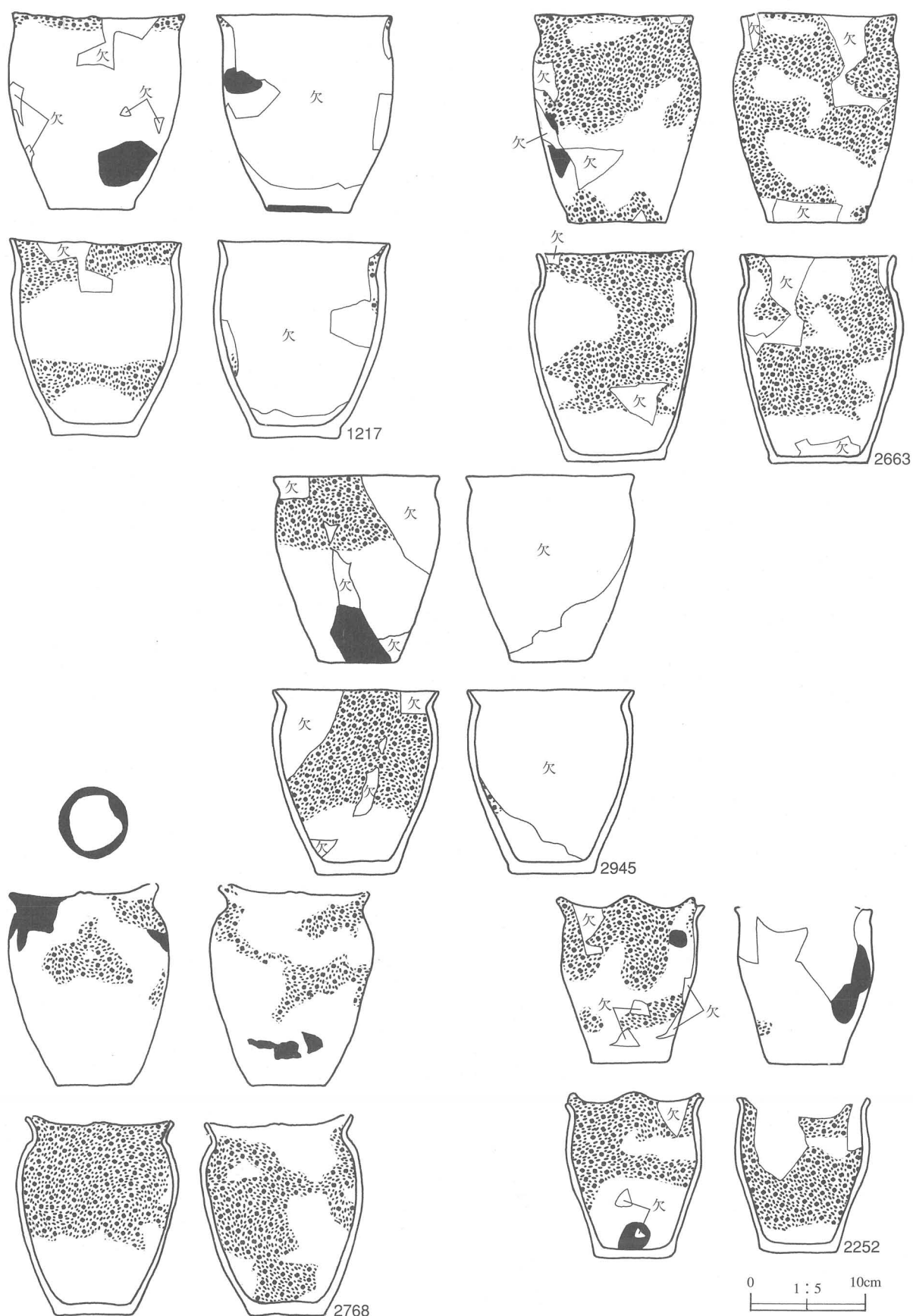
岩手県の蓋については、小田野哲憲氏の先駆的研究があり(小田野 1983)、炭化物の付着状況から「かぶせ蓋」と「落とし蓋」の区分もしている。そして、「すぐに『米』と結びつけるつもりはないが、いずれ従来は無かった食糧の調理に蓋形土器は大いに使用されたであろう。新しい食糧として米だけに限らずアワ、ヒエなどの穀類一般を想定することは、あながち見当違いとは言いつくぬであろう」(p.73)としている。

今回の調査では、炭化米や粳圧痕など米の存在を裏付けるものは全く出土しなかった。これをもってして米がなかった証拠とするわけにはいかないが、小田野氏が指摘した米以外の穀類の可能性は今後も検討していく必要がある。

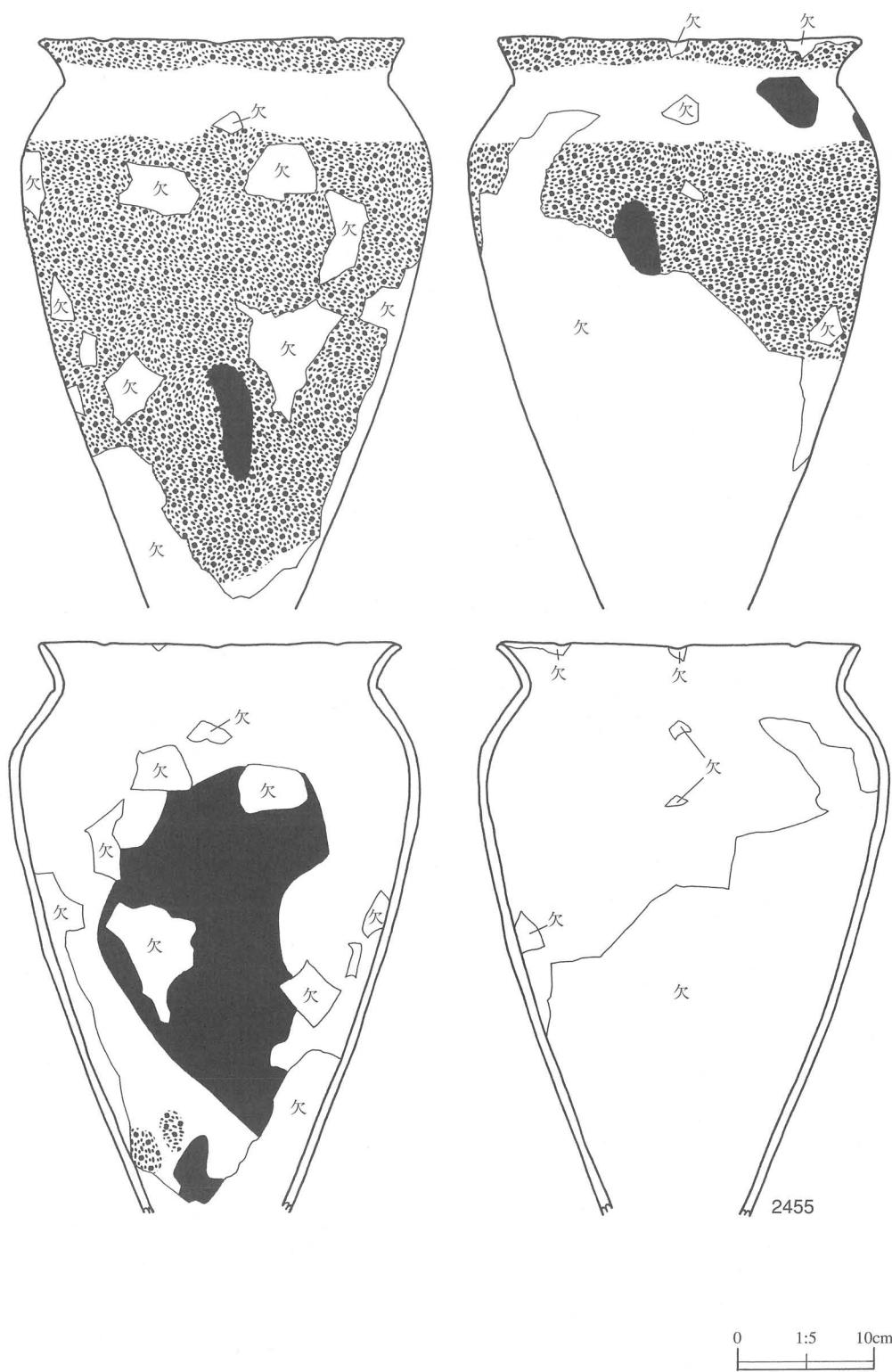
以上、金附遺跡における縄文時代晩期末～弥生時代前期土器の製作、使用の状況を見てきたが、はっきりした結論を導くことはできなかった。しかし、この時期細かな変化は確かに認められるが、どちらかと言えば継続性の強さの方が目に付いた。つまり、土器の型式編年の検討と同じ結論となる。

## 参考文献

- 小田野哲憲 1983「岩手県出土の『蓋形土器』について」『岩手県立博物館研究報告』第 1 号  
 小林正史 1999「煮炊き用土器の作り分けと使い分け」『食の復元- 遺跡・遺物から何を読みとるか』帝京大学山梨文化財研究所 研究集会報告集 2  
 2003「使用痕跡からみた縄文・弥生土器による調理方法」『石川考古学研究会々誌』第 46 号  
 小林正史ほか 1999「黒斑からみた縄文土器の野焼き方法」『日本考古学』第 8 号  
 2003「黒斑からみた弥生土器の覆い型野焼きの特徴」『日本考古学』第 16 号 日本考古学協会  
 須藤 隆 1983「東北地方の初期弥生土器- 山王Ⅲ層式-」『考古学雑誌』第 68 巻第 3 号 日本考古学会  
 仙台市教育委員会 1996『中在家南遺跡他』仙台市文化財調査報告書第 213 集

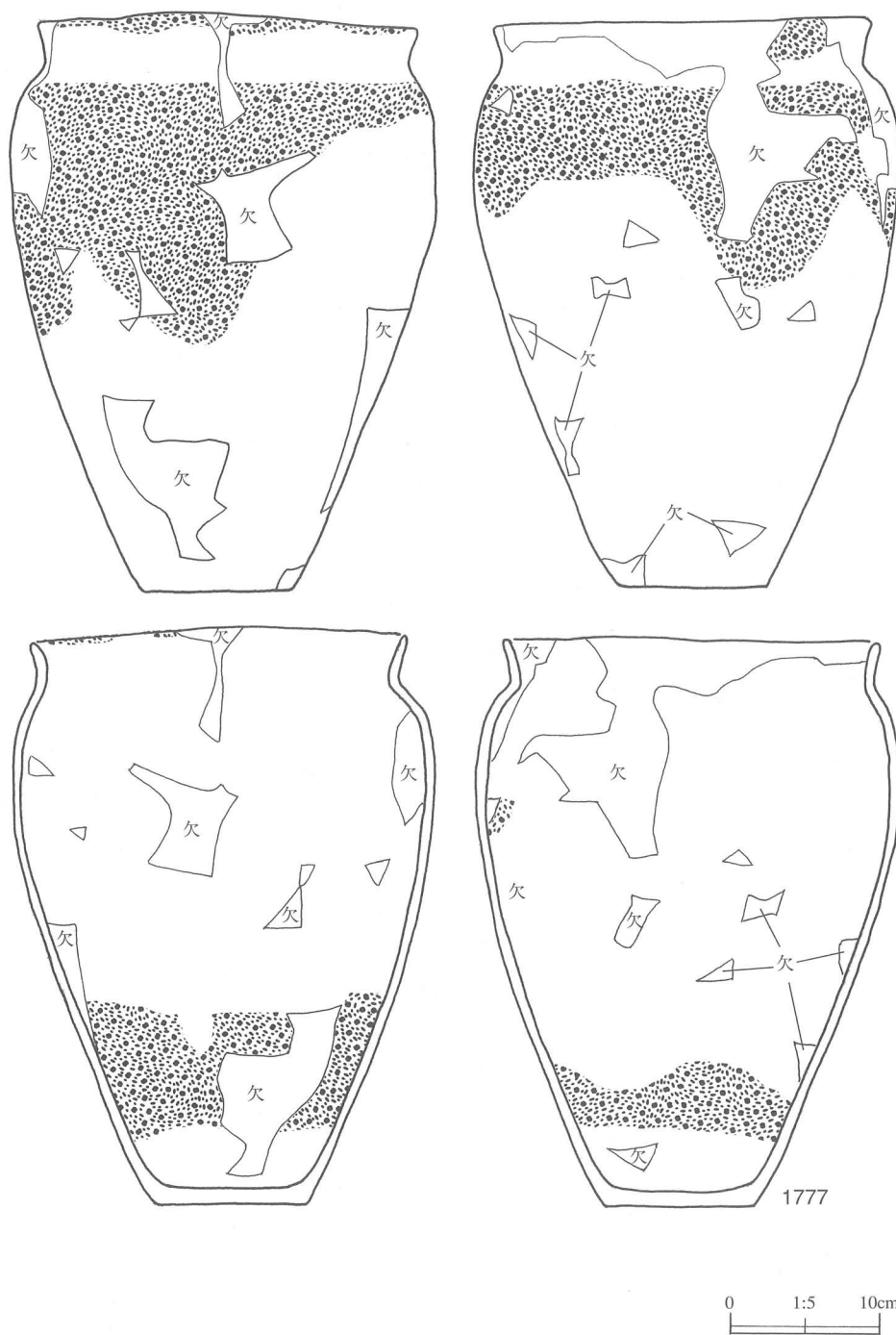


第 537 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (1)

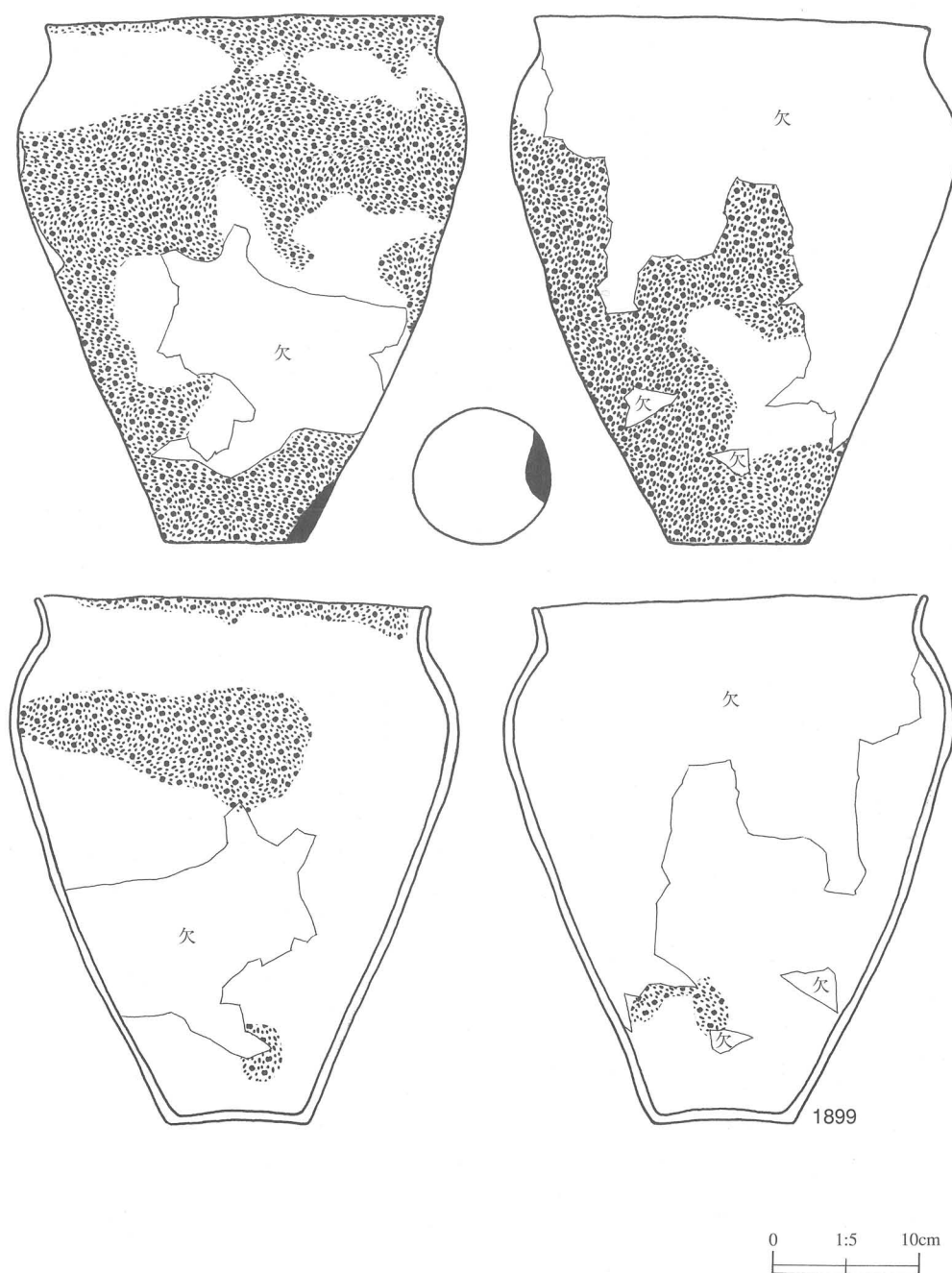


第 538 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (2)

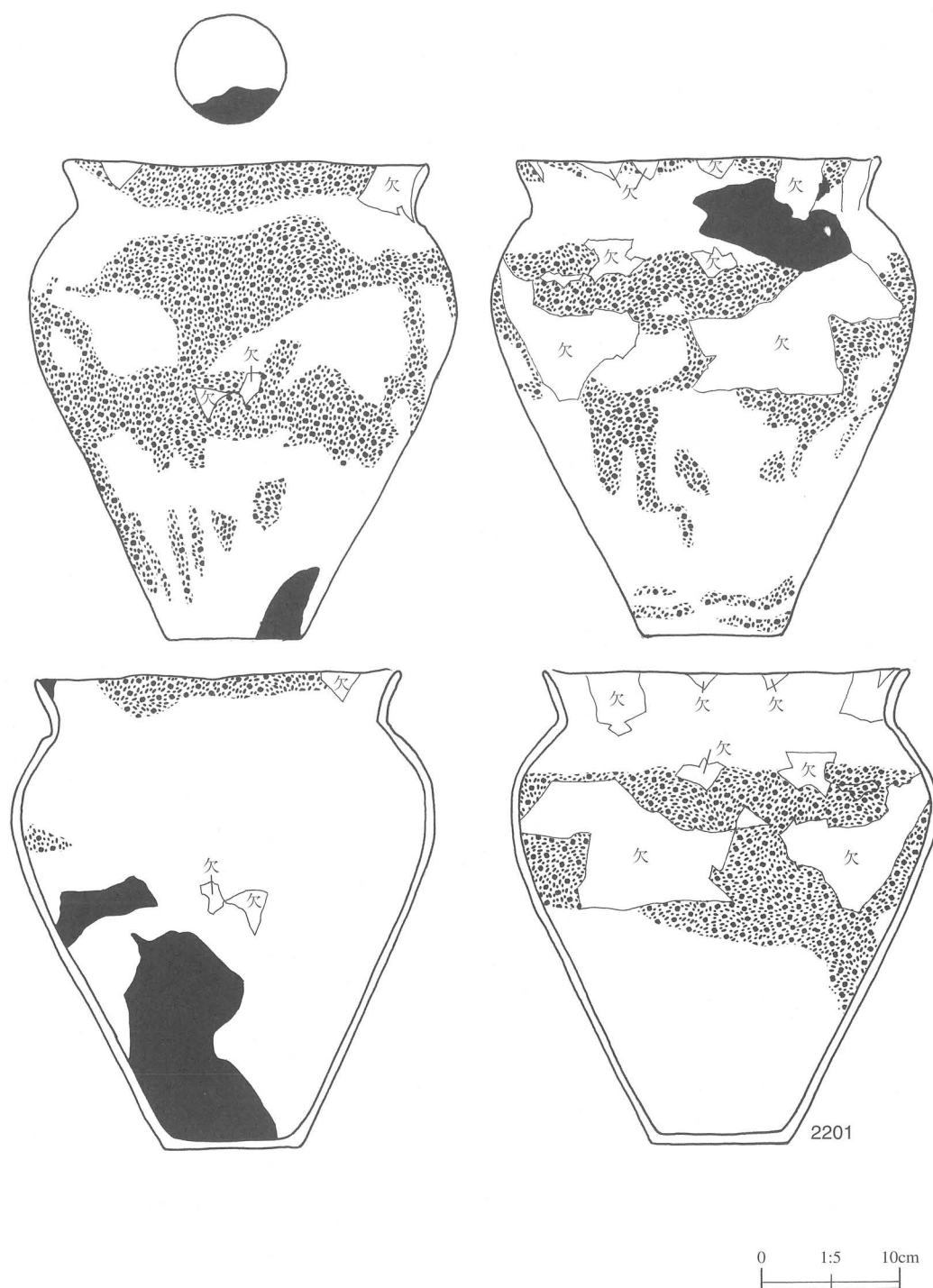




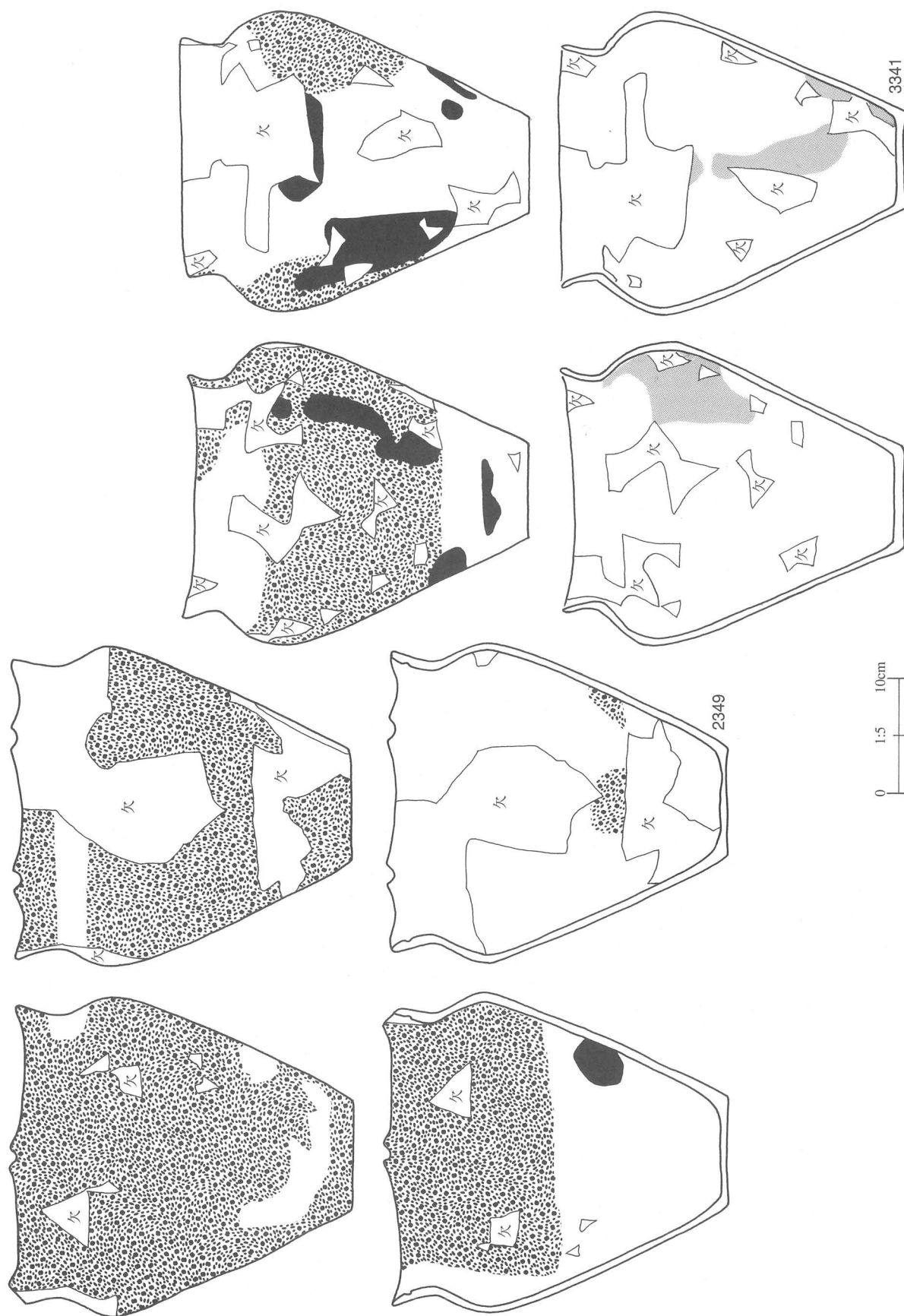
第 539 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (3)



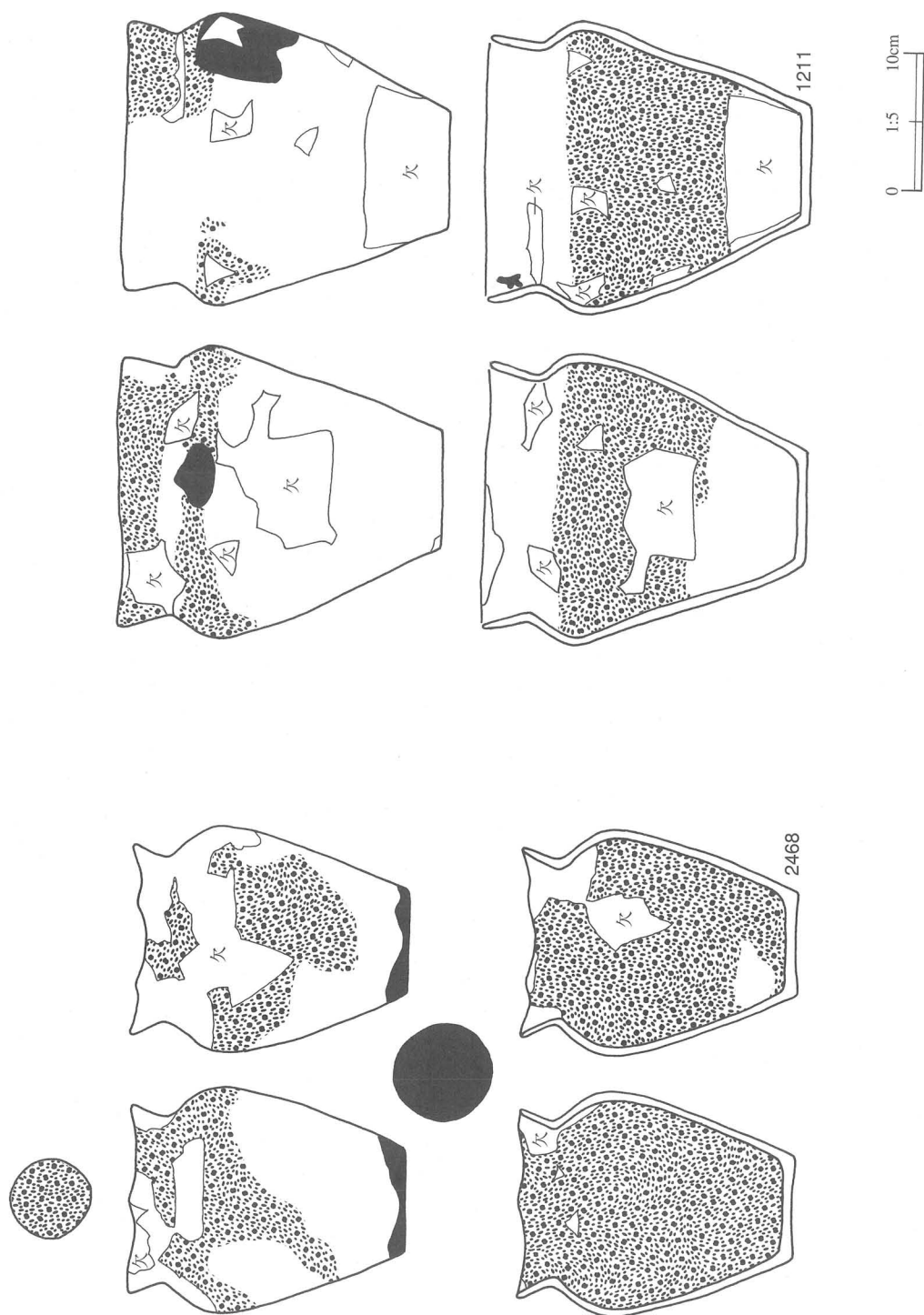
第 540 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (4)



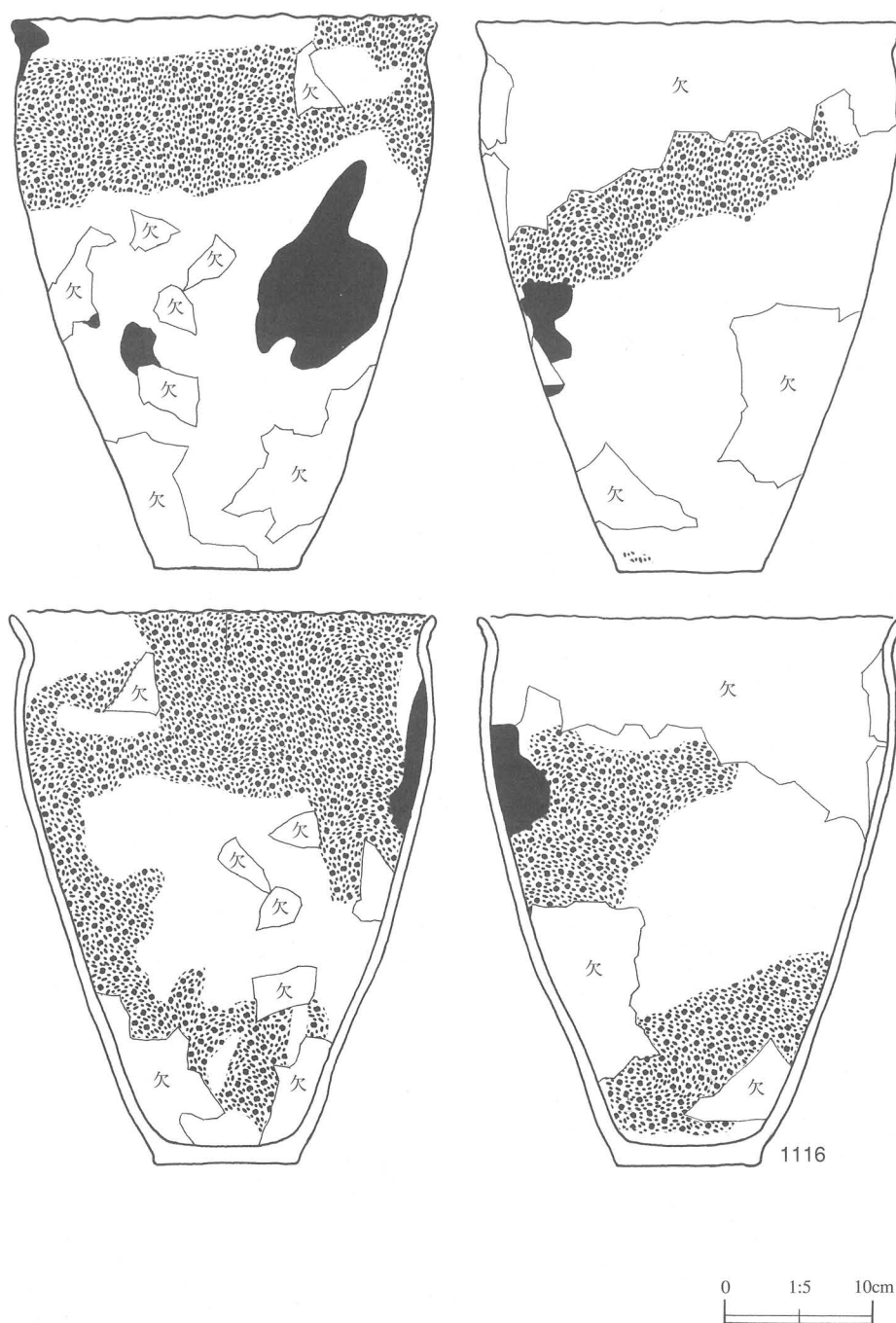
第 541 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (5)



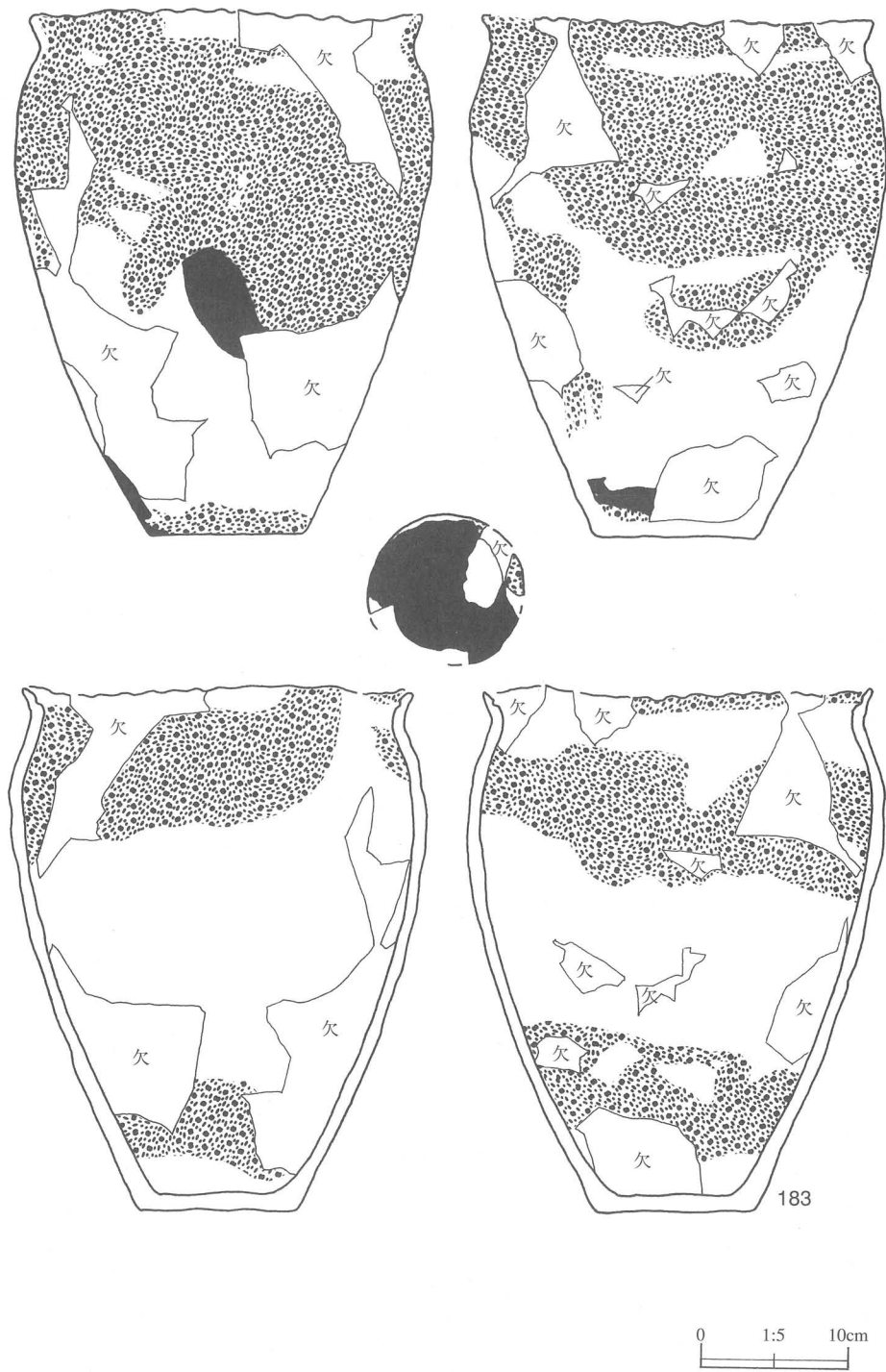
第 542 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (6)



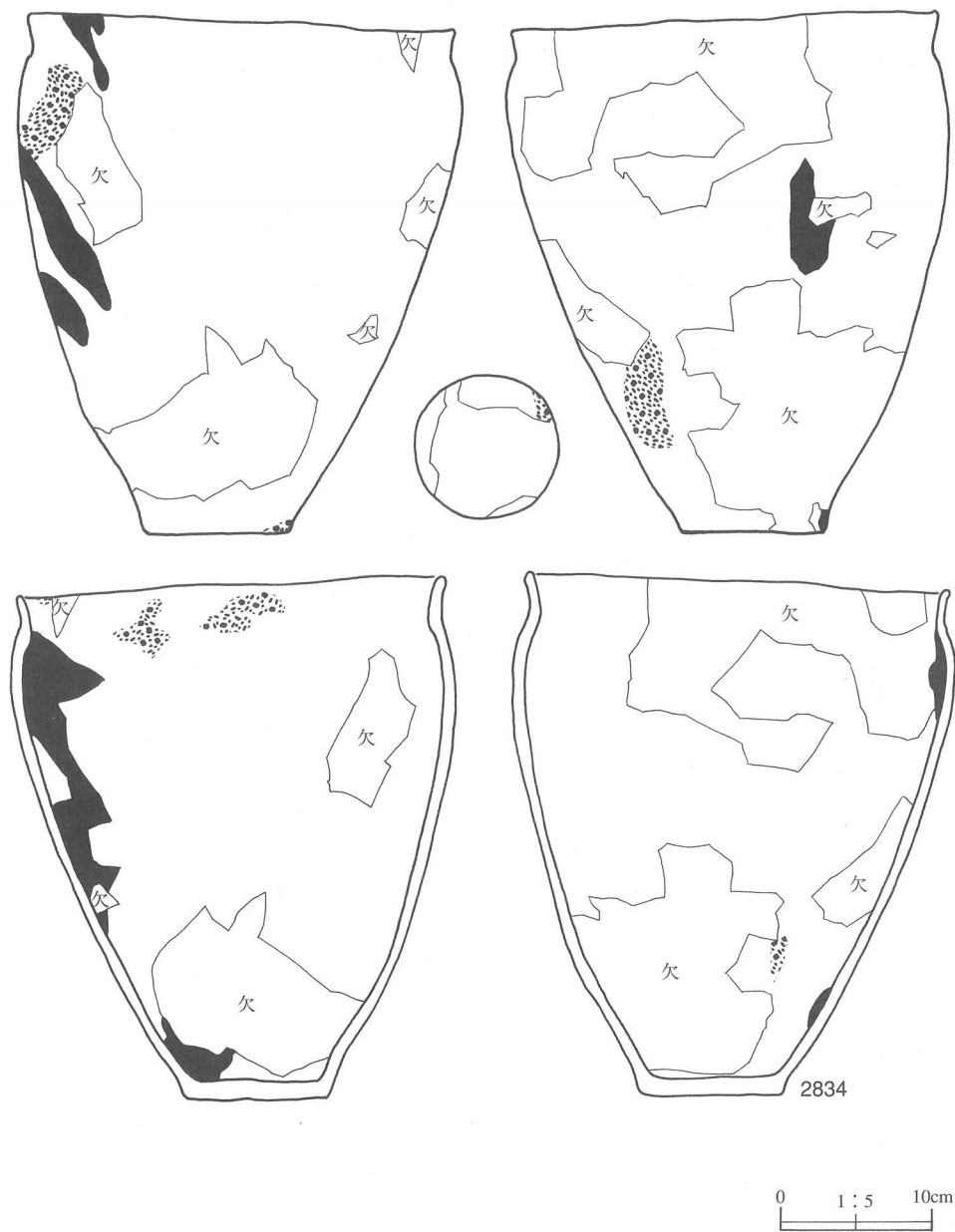
第 543 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (7)



第 544 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (8)

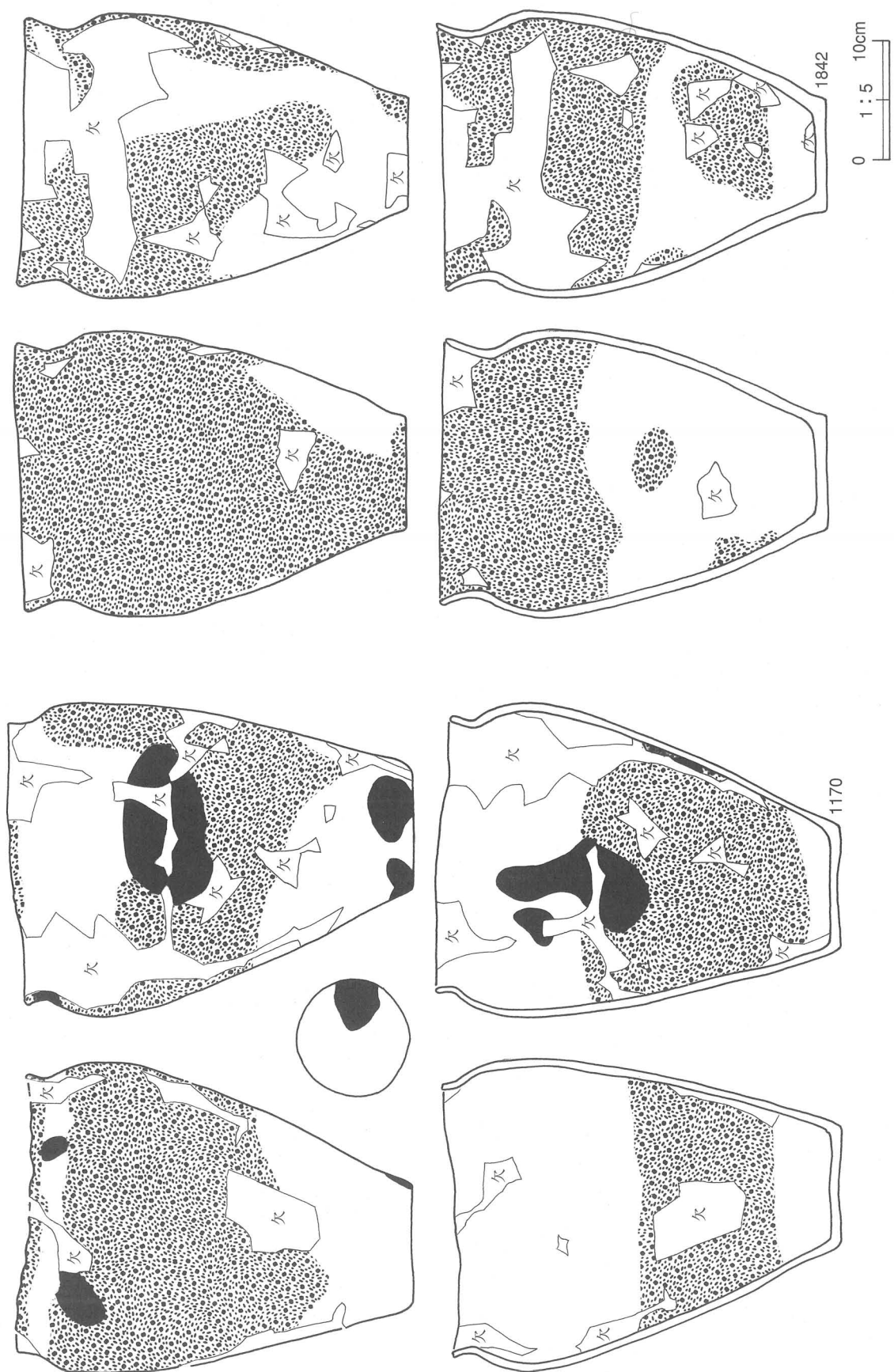


第 545 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (9)

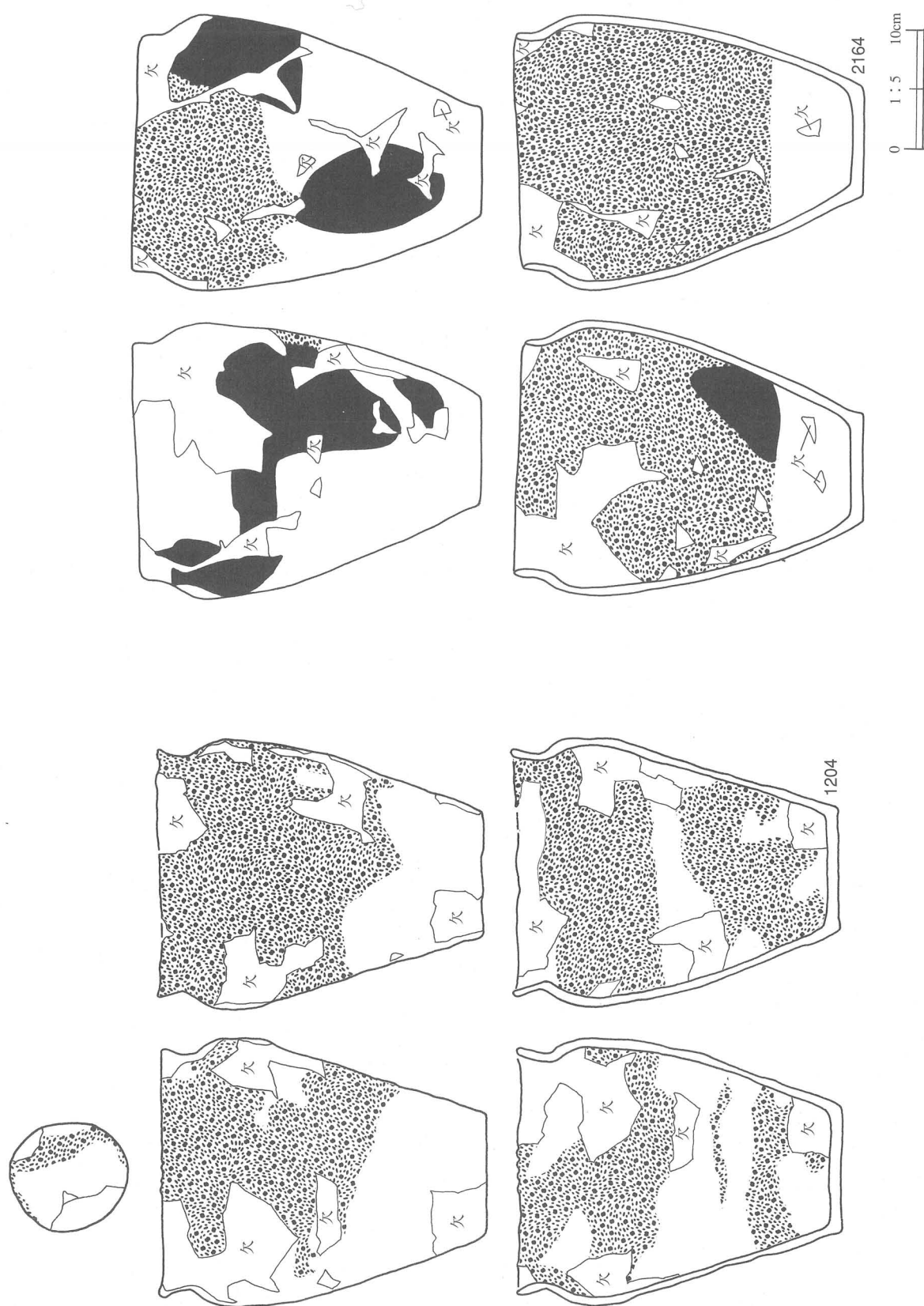


第 546 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (10)

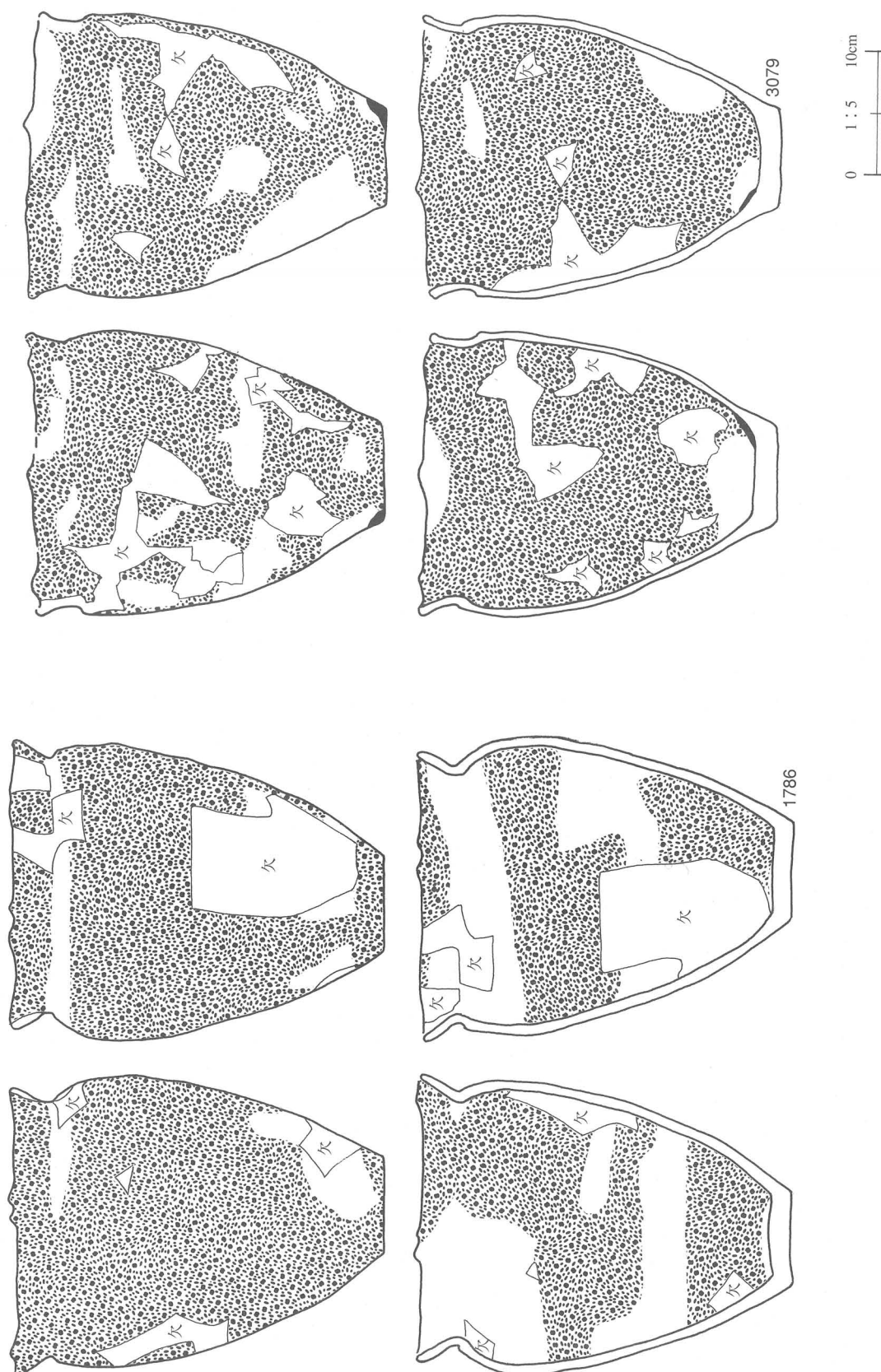




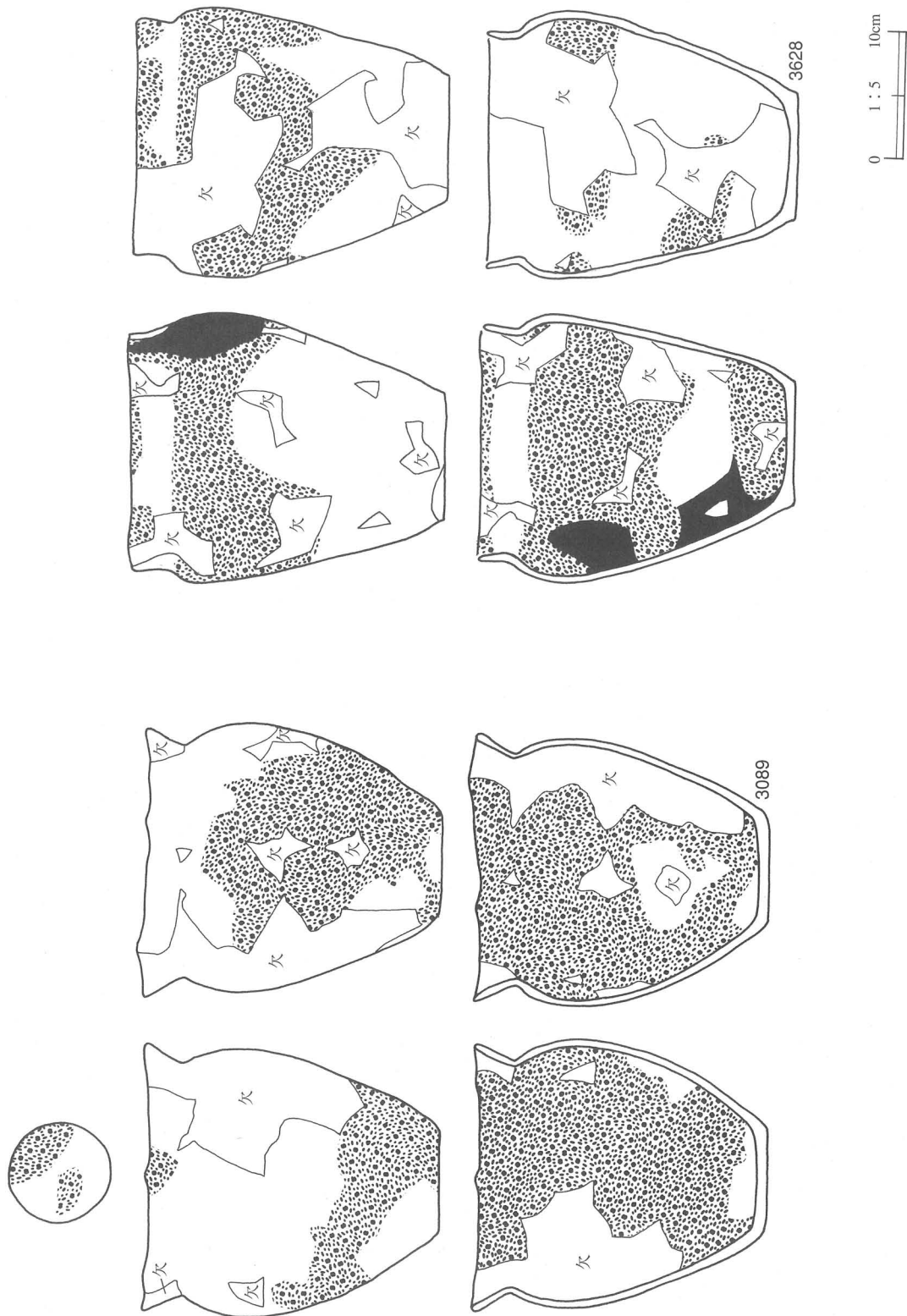
第 547 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (11)



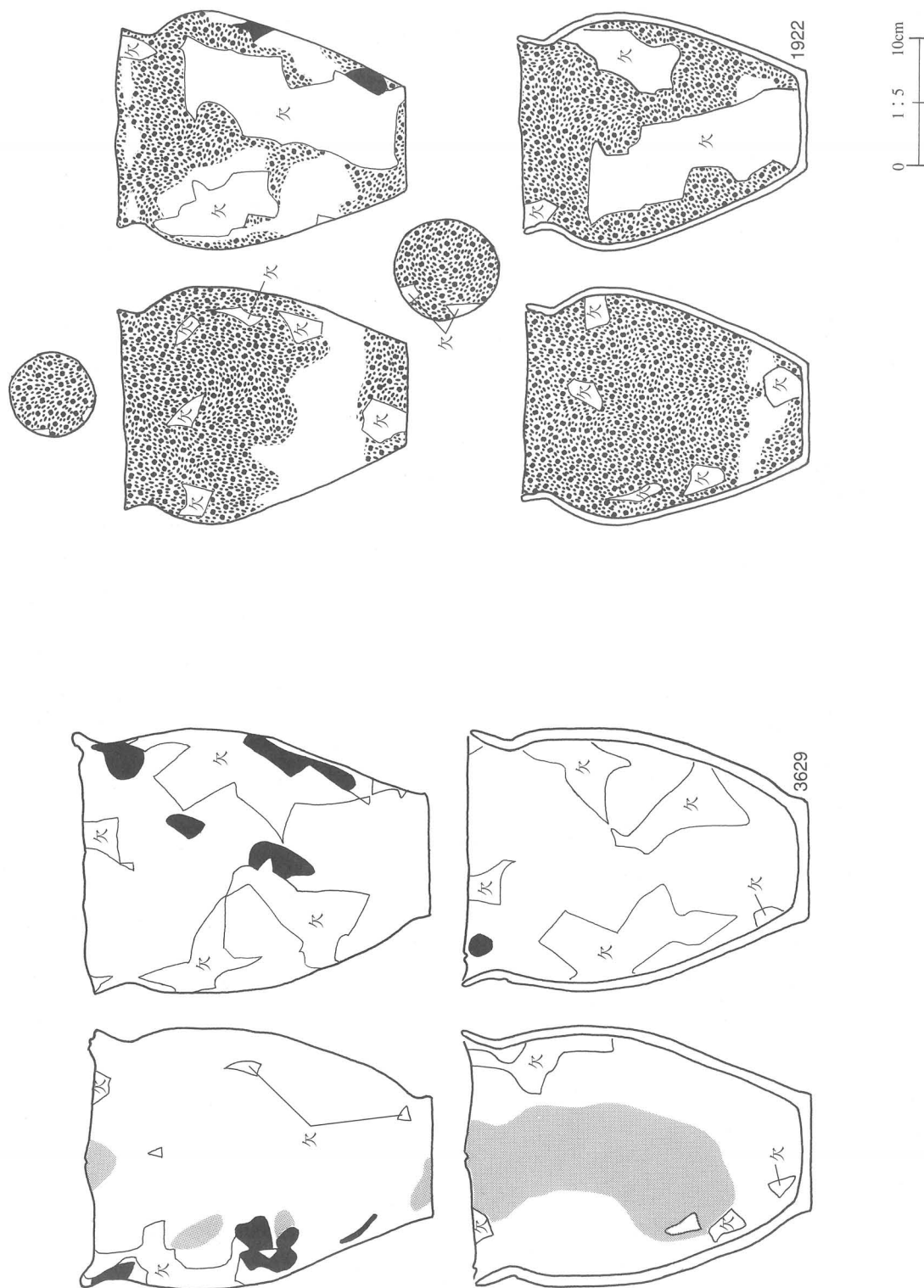
第 548 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (12)



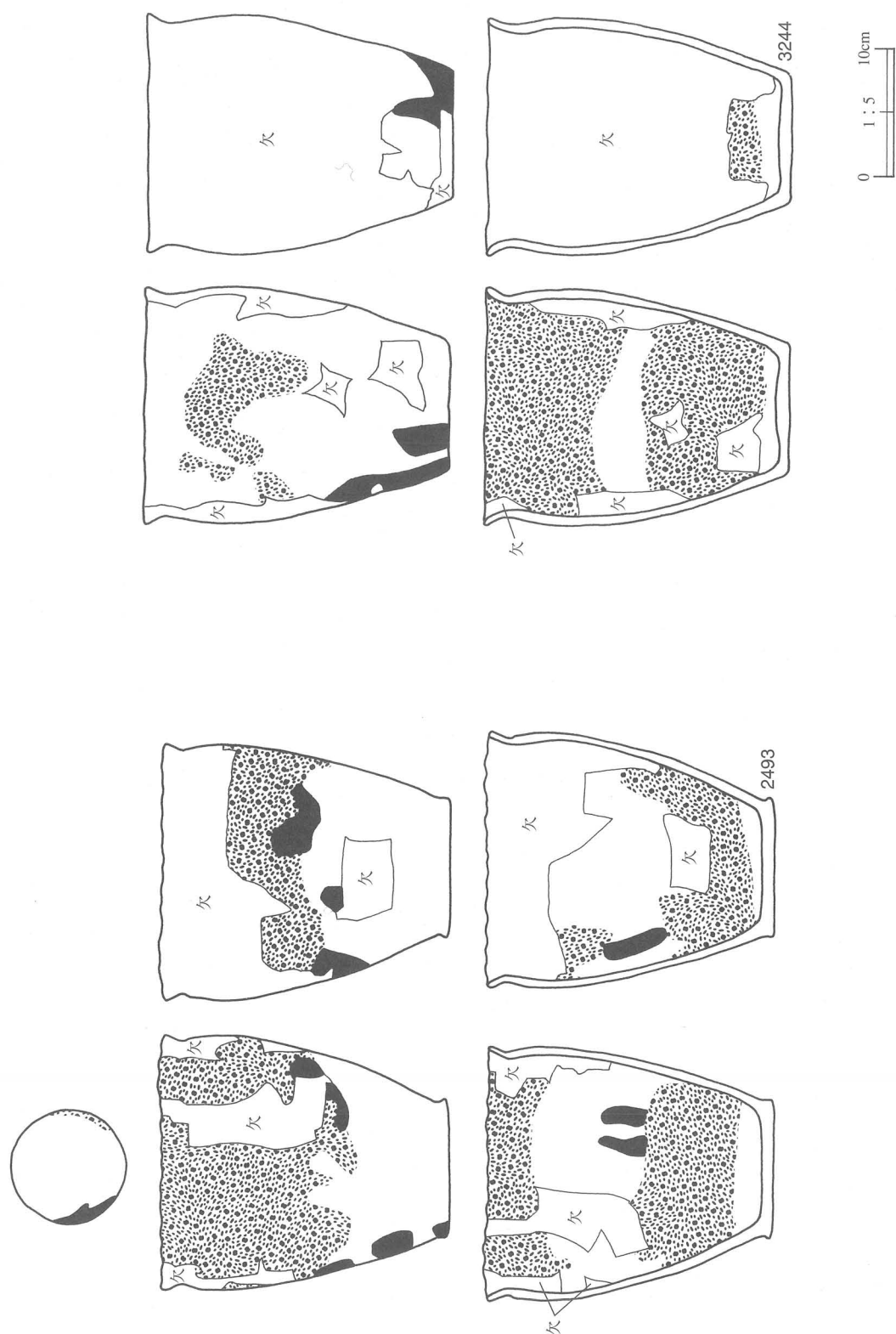
第 549 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (13)



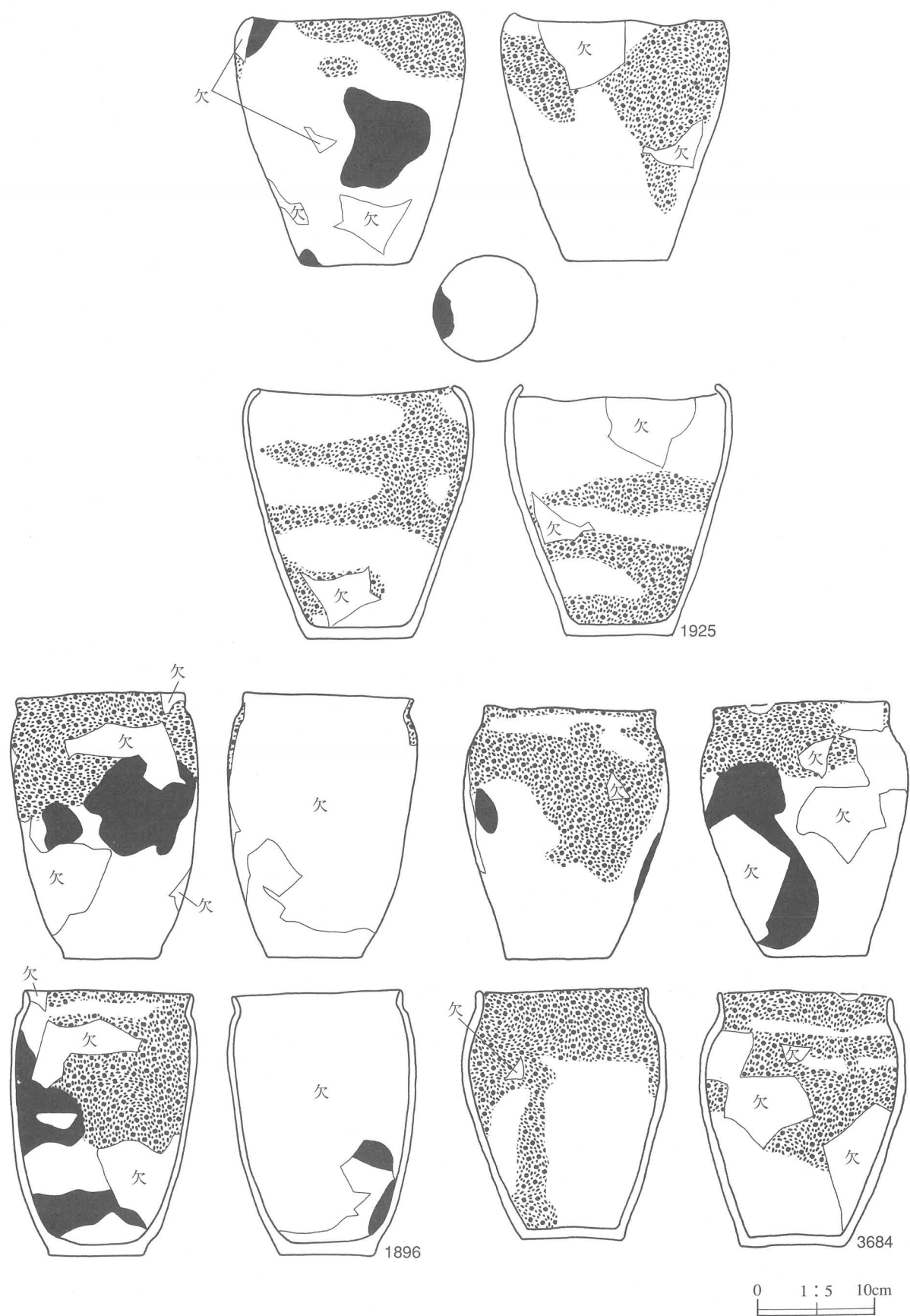
第 550 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (14)



第 551 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (15)

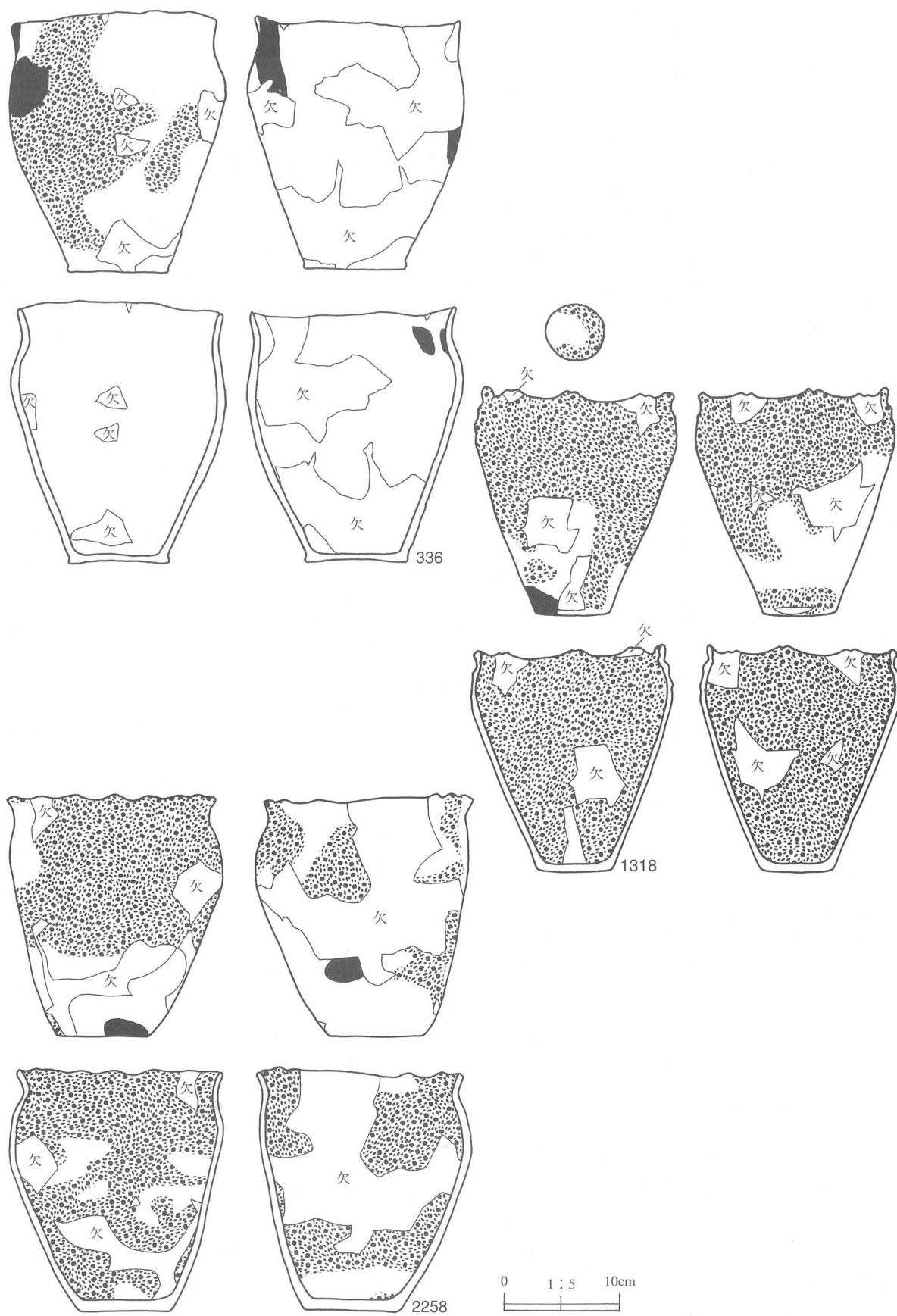


第 552 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (16)



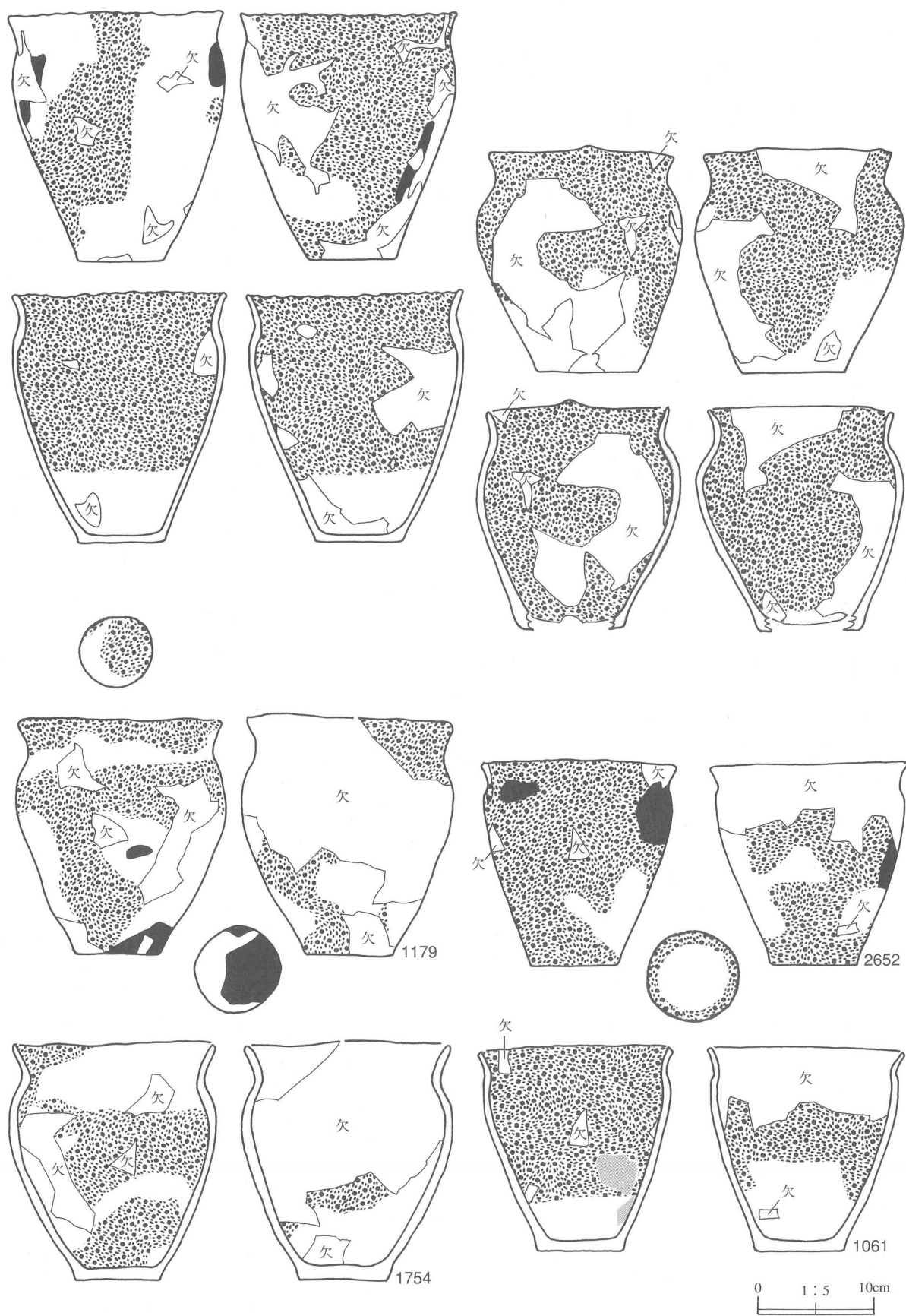
第 553 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (17)



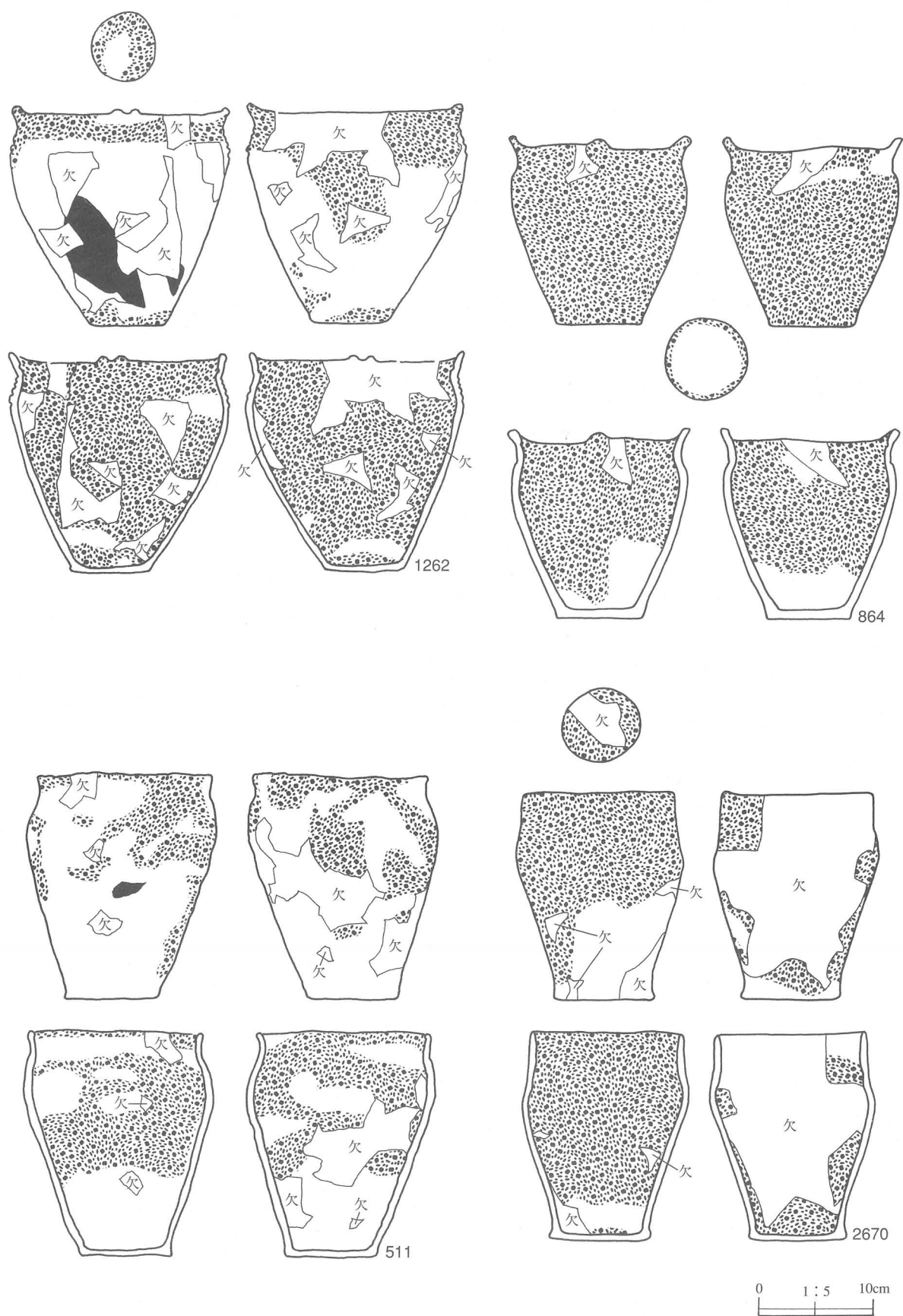


第 554 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (18)

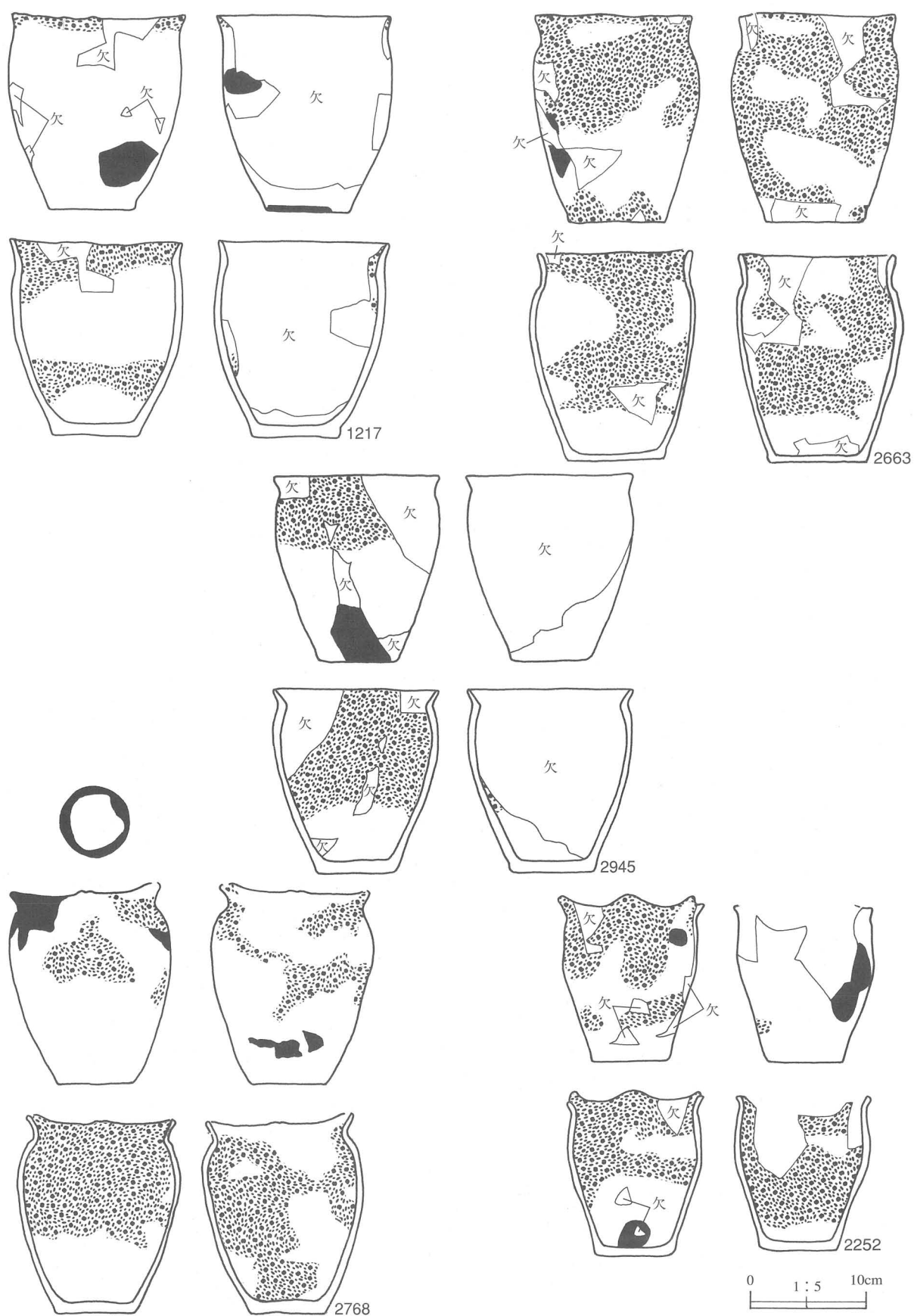




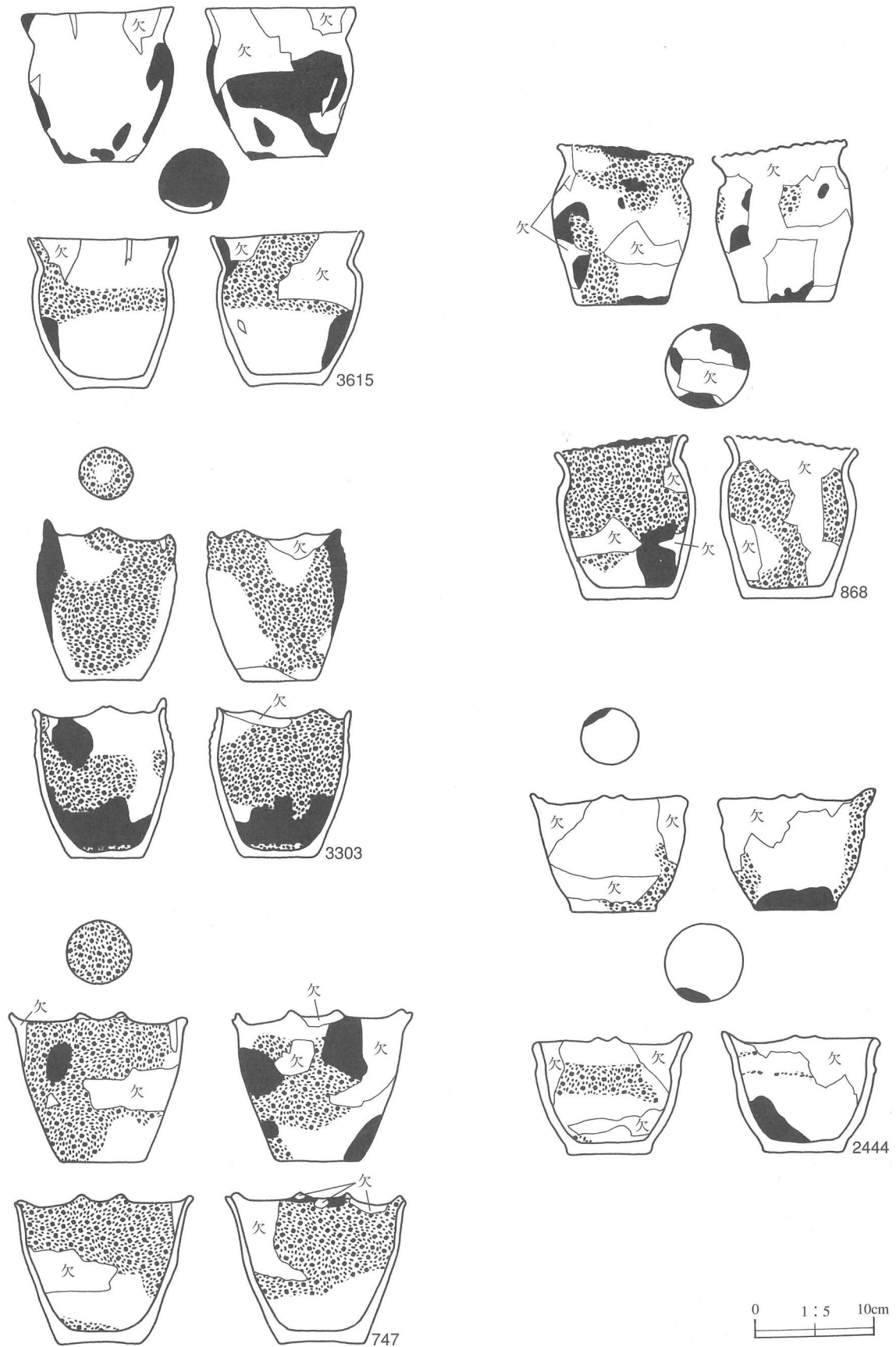
第 555 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (19)



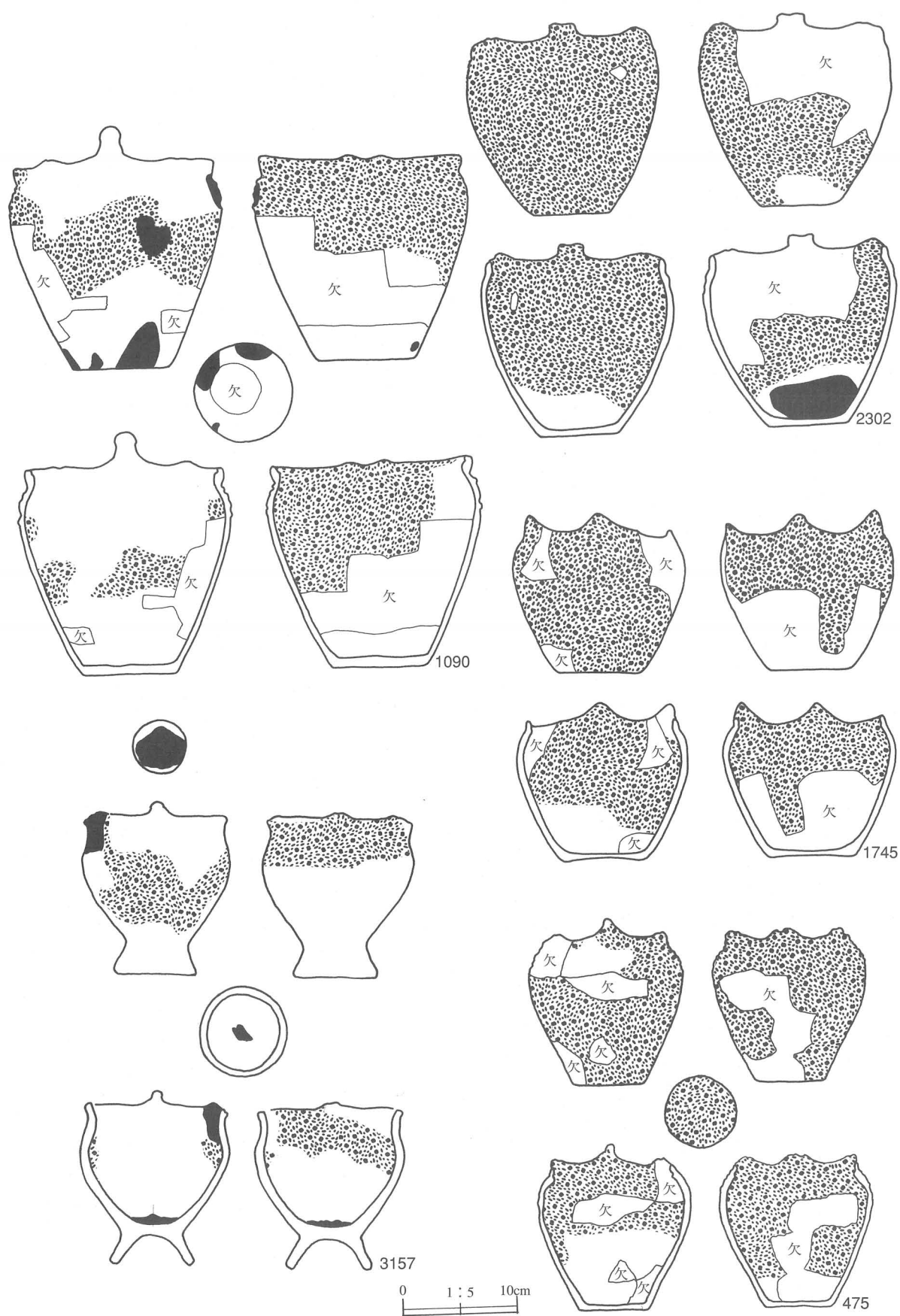
第 556 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (20)



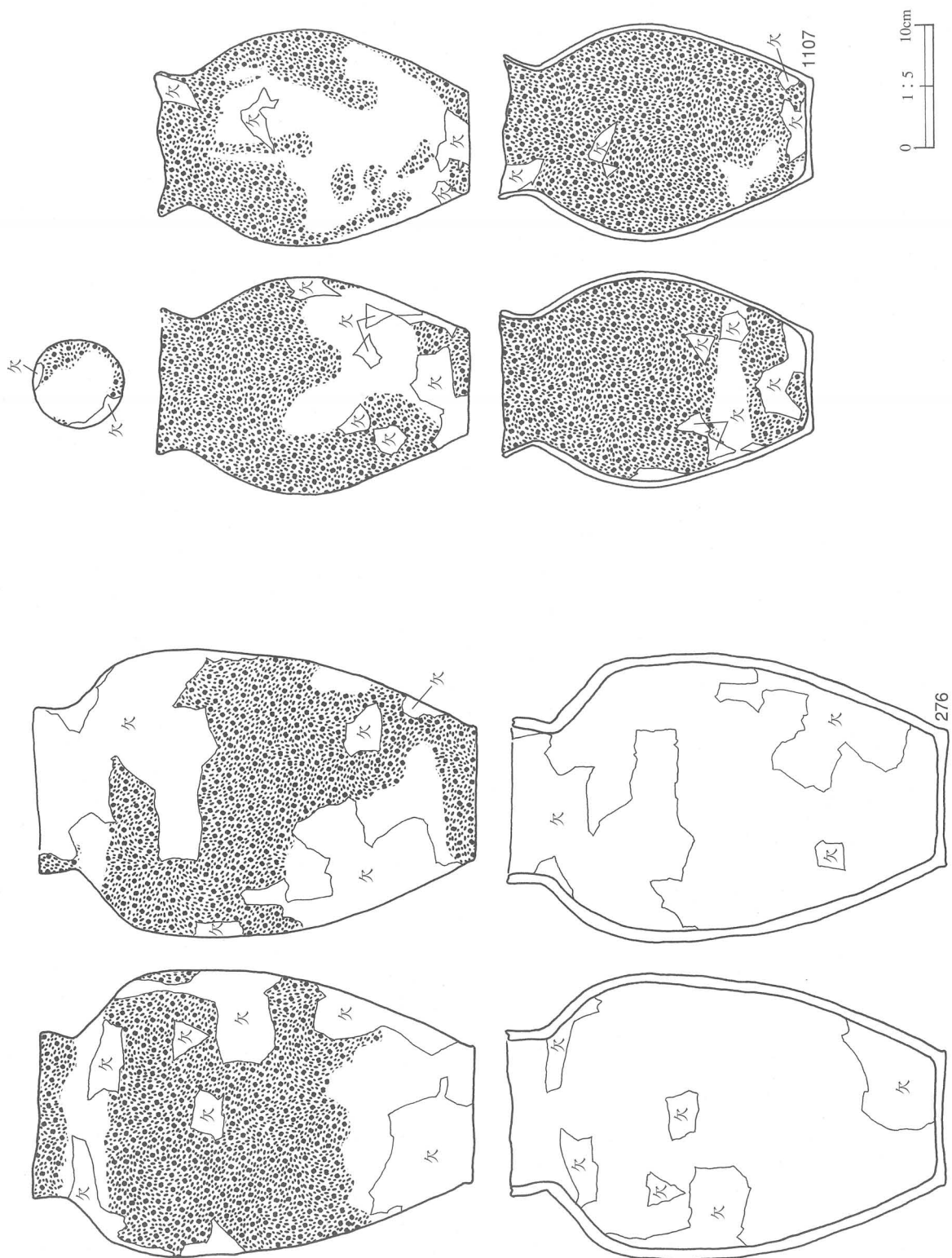
第 557 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (21)



第 558 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (22)

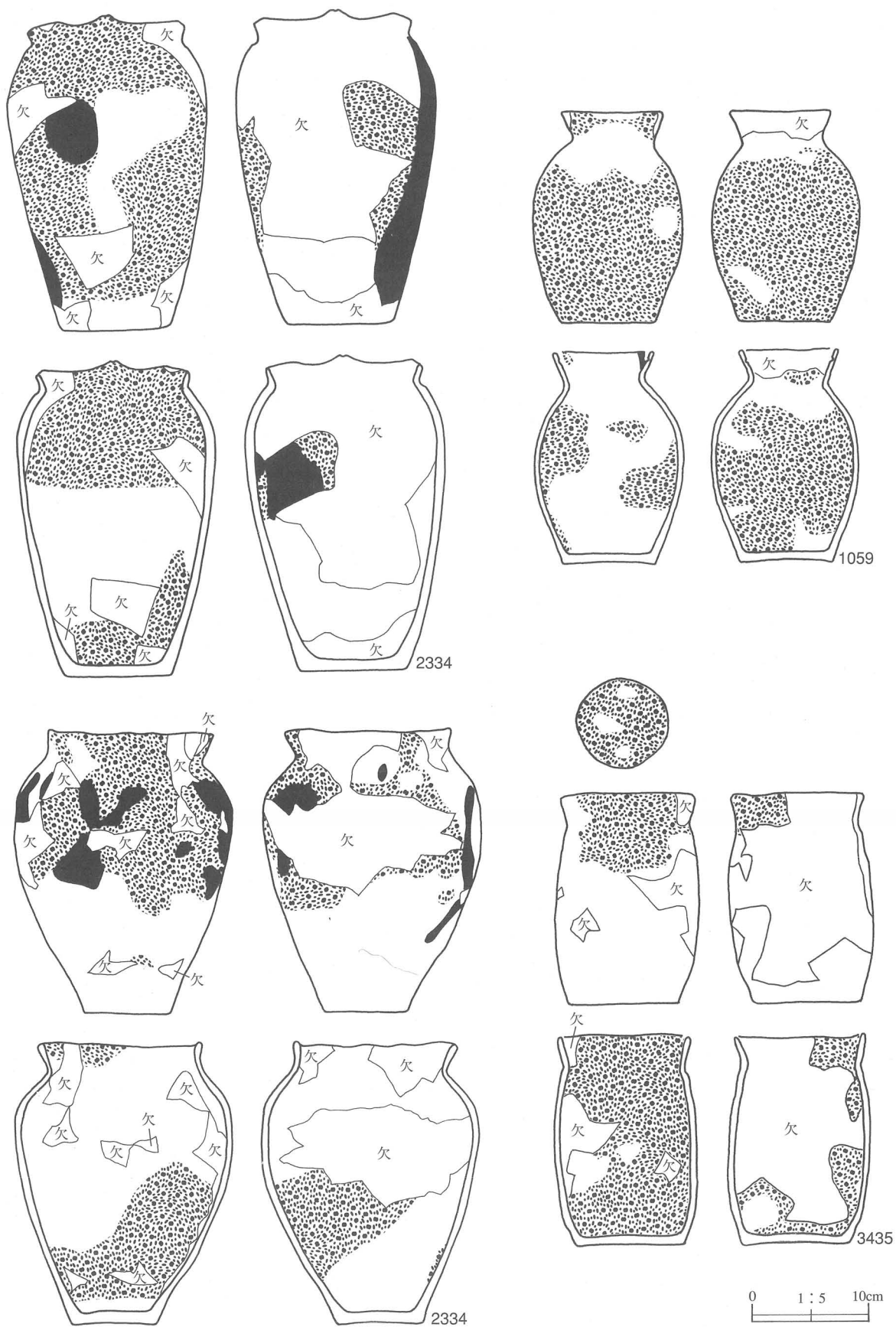


第 559 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (23)

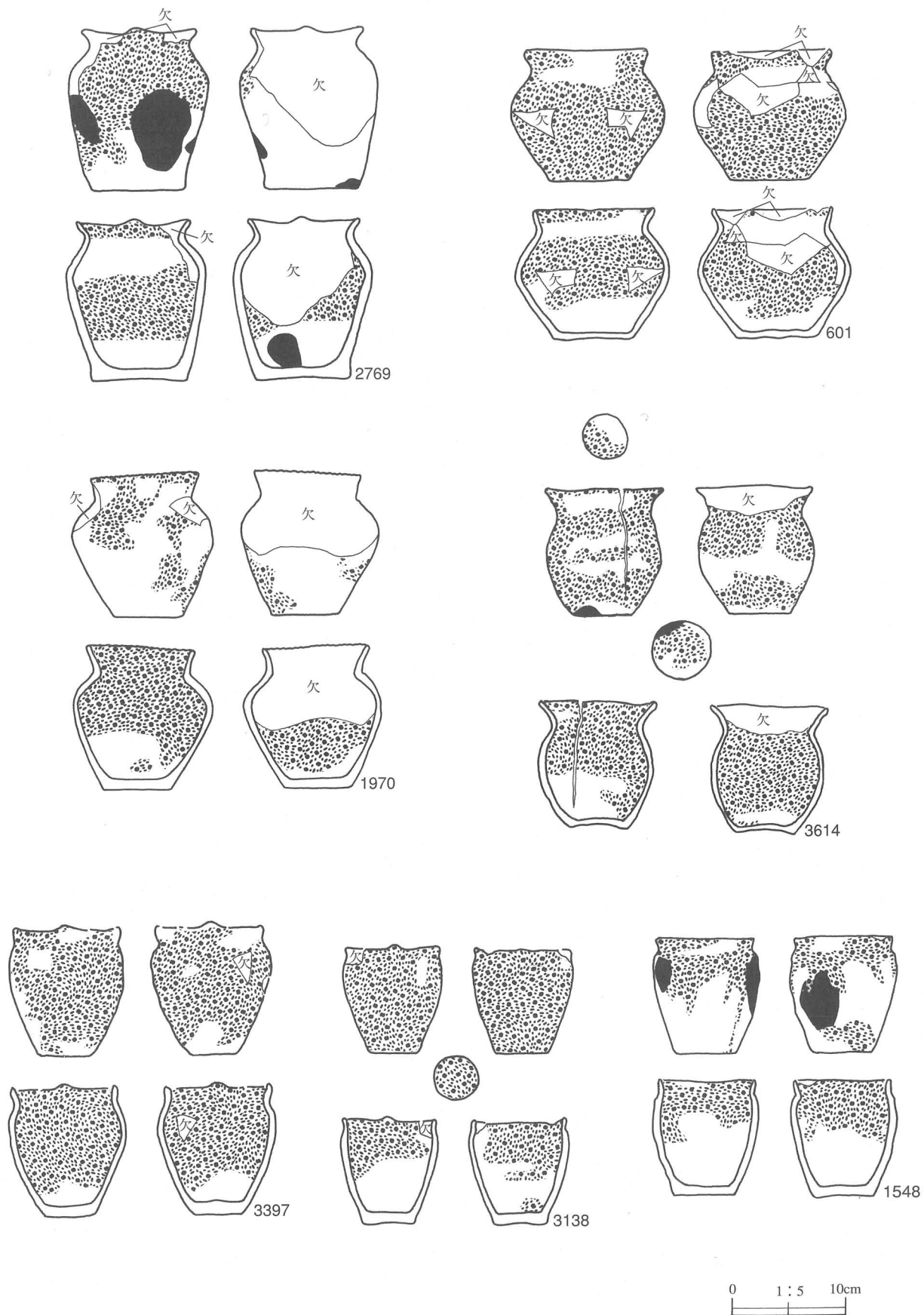


第 560 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (24)



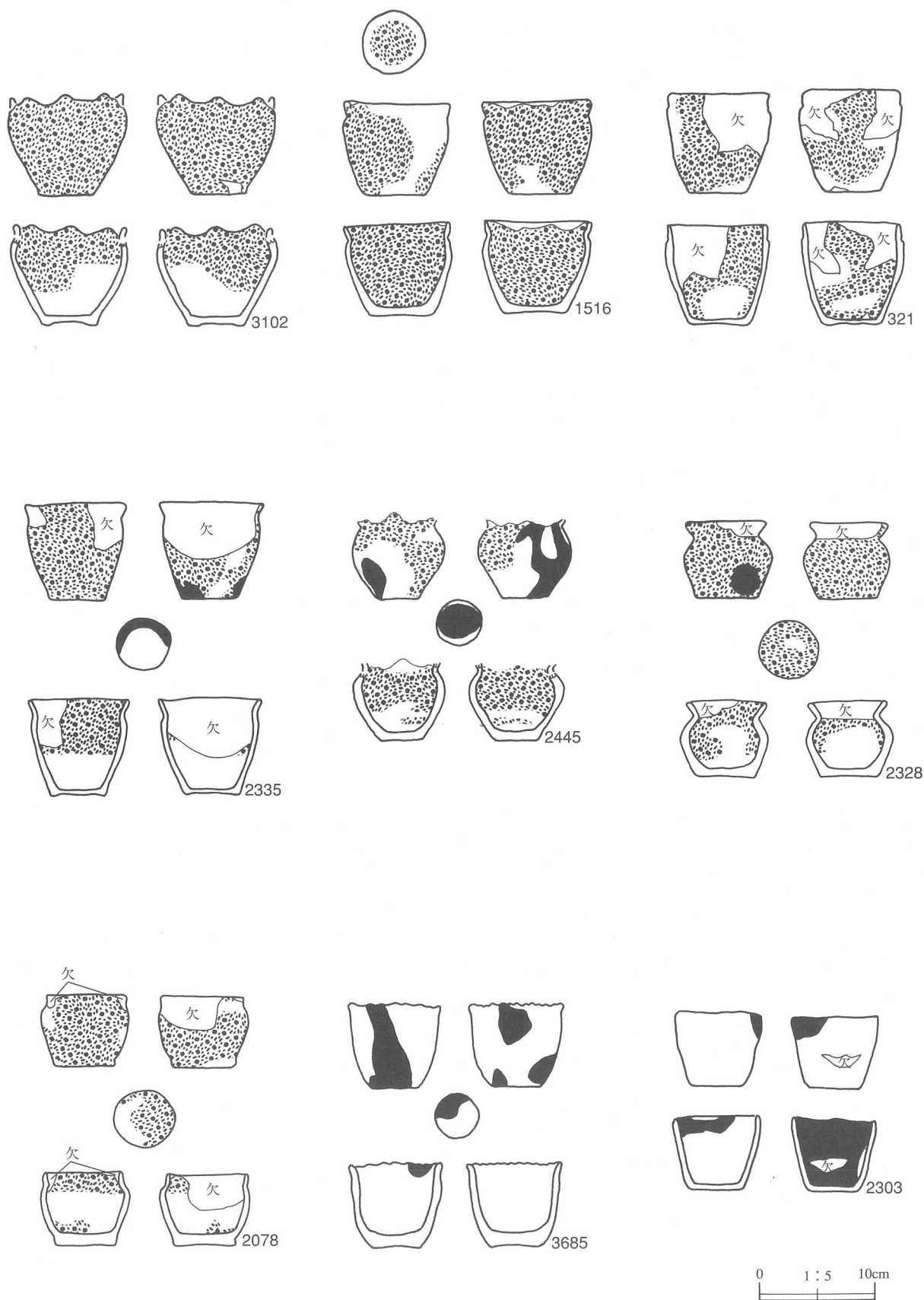


第 561 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (25)

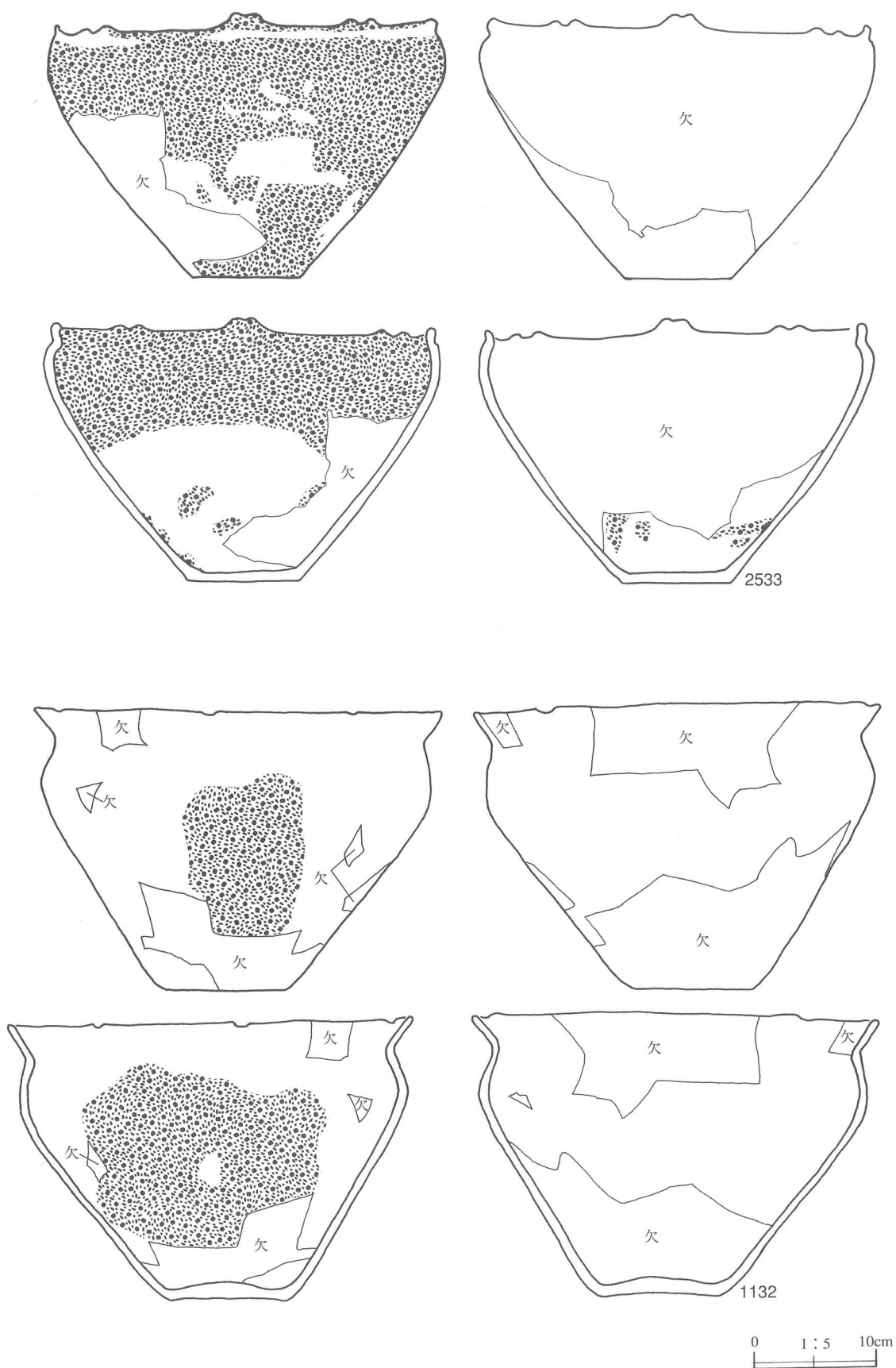


第 562 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (26)

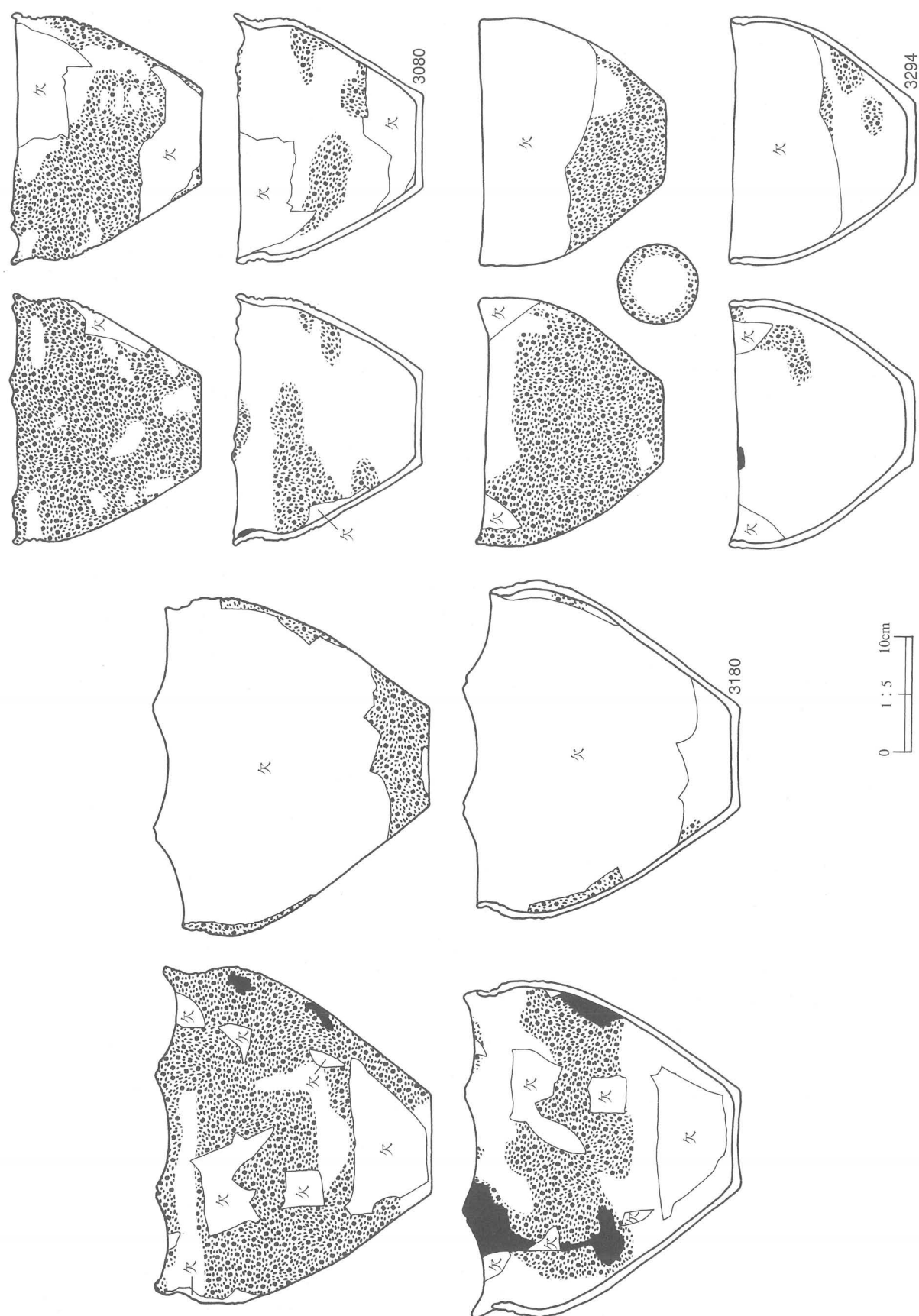




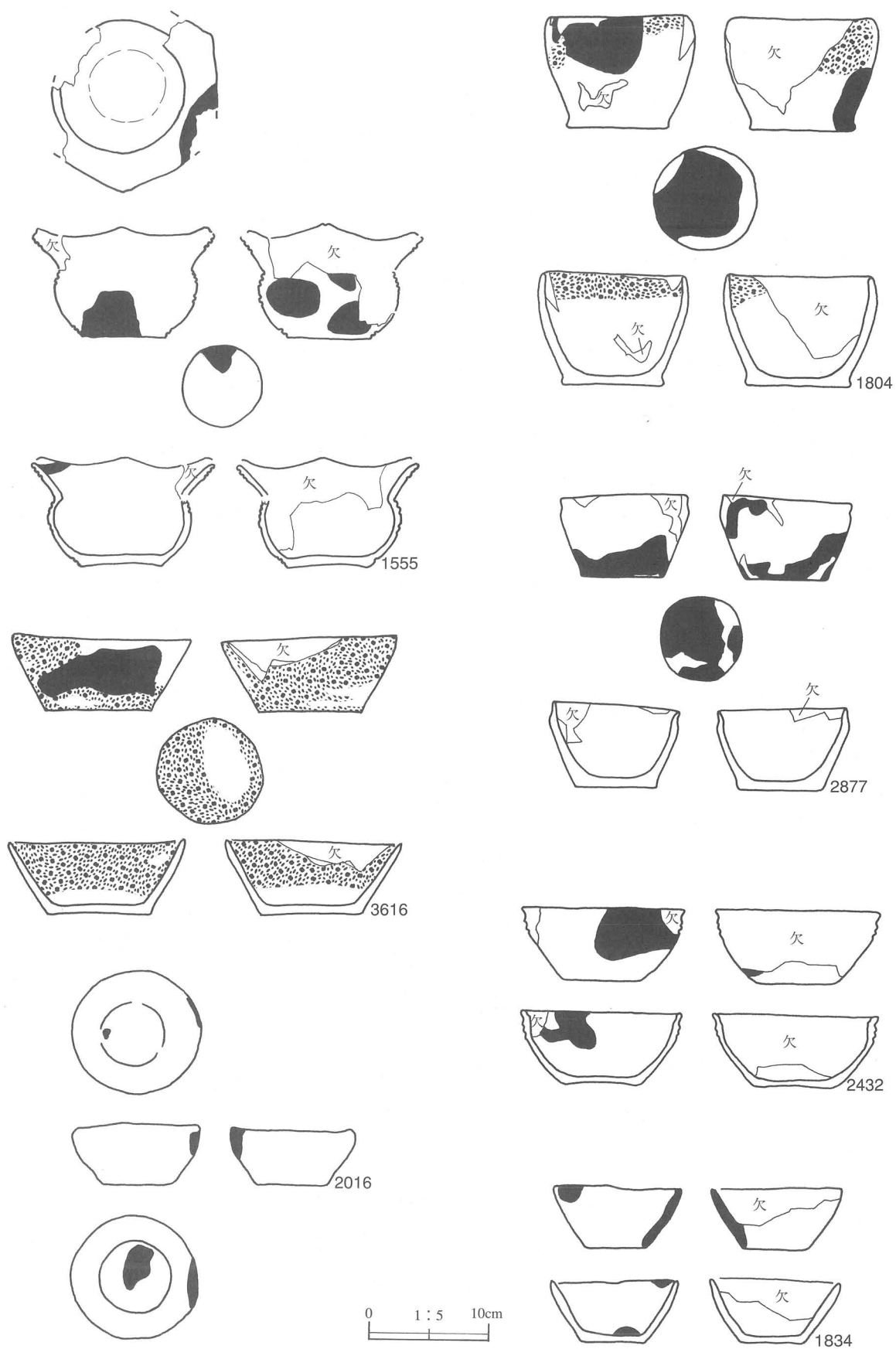
第 563 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (27)



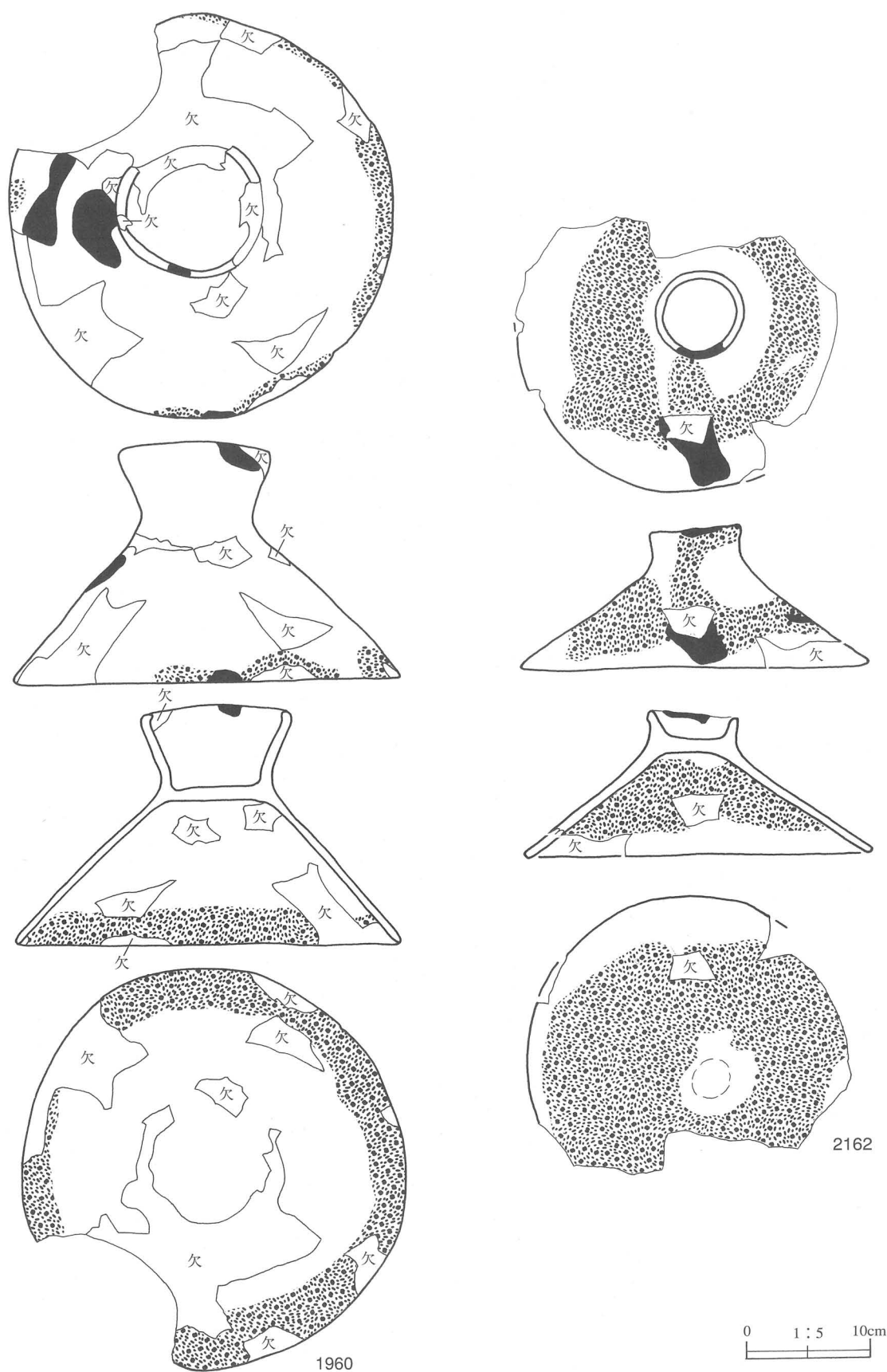
第 564 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (28)



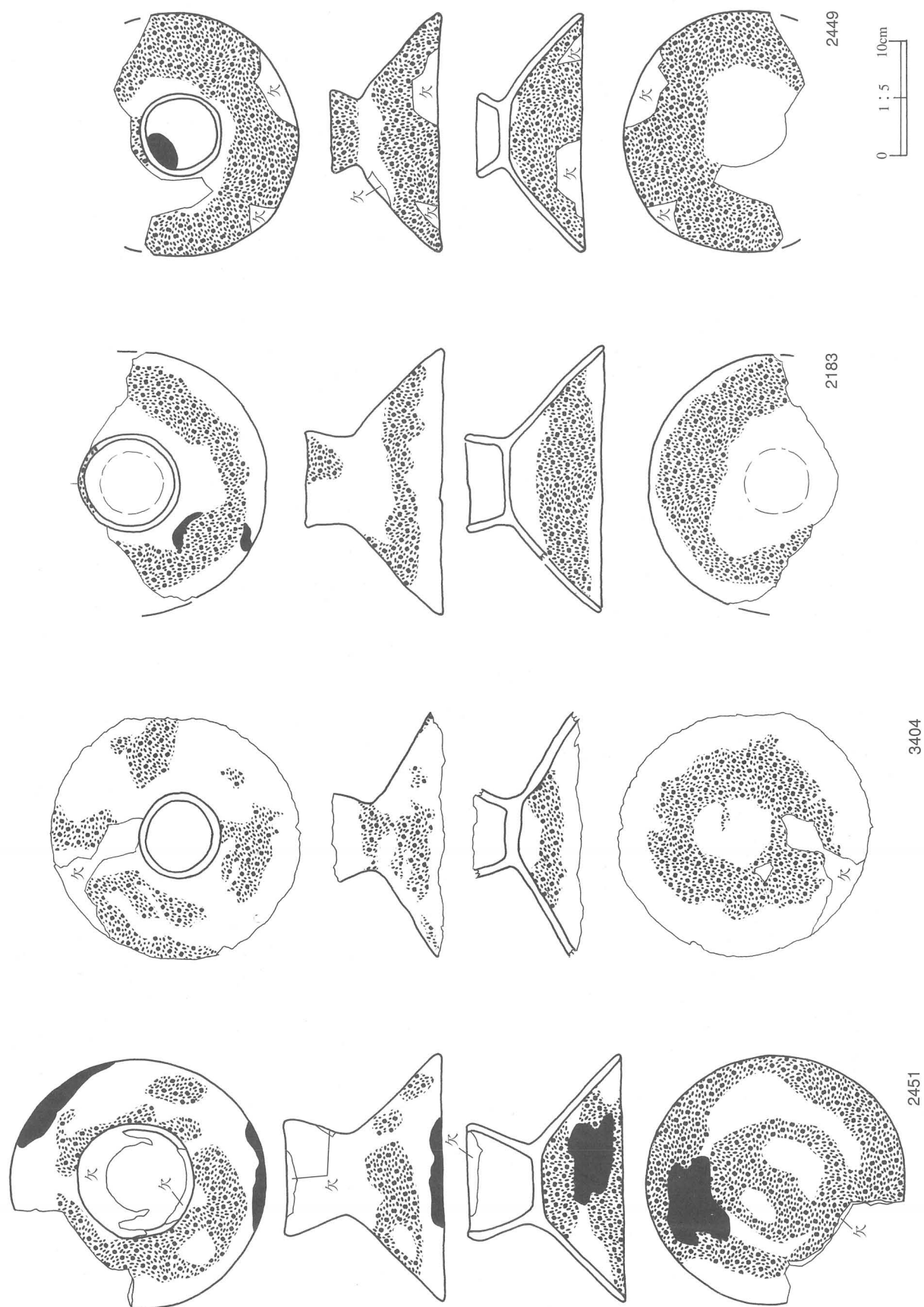
第 565 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (29)



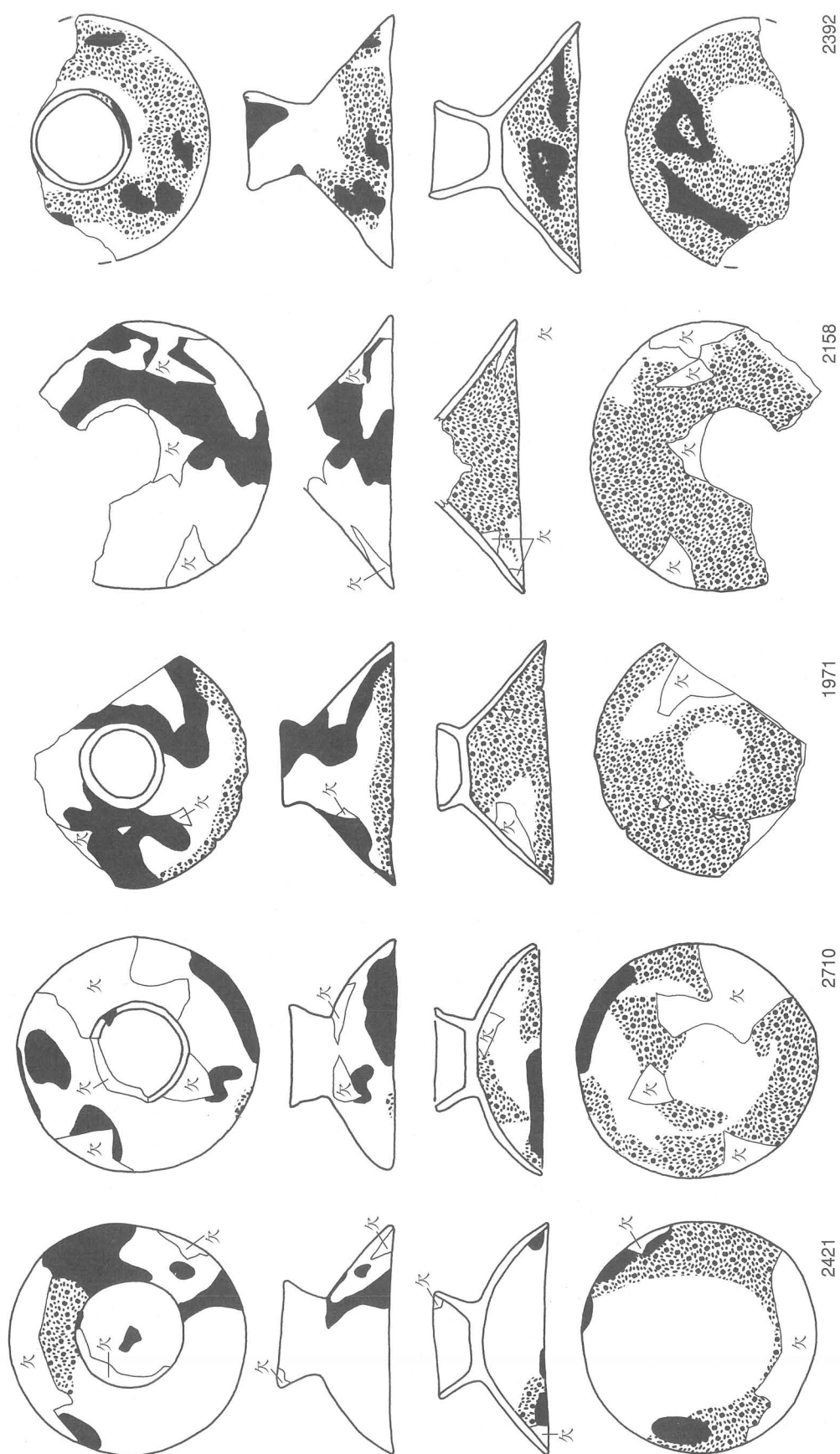
第 566 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (30)



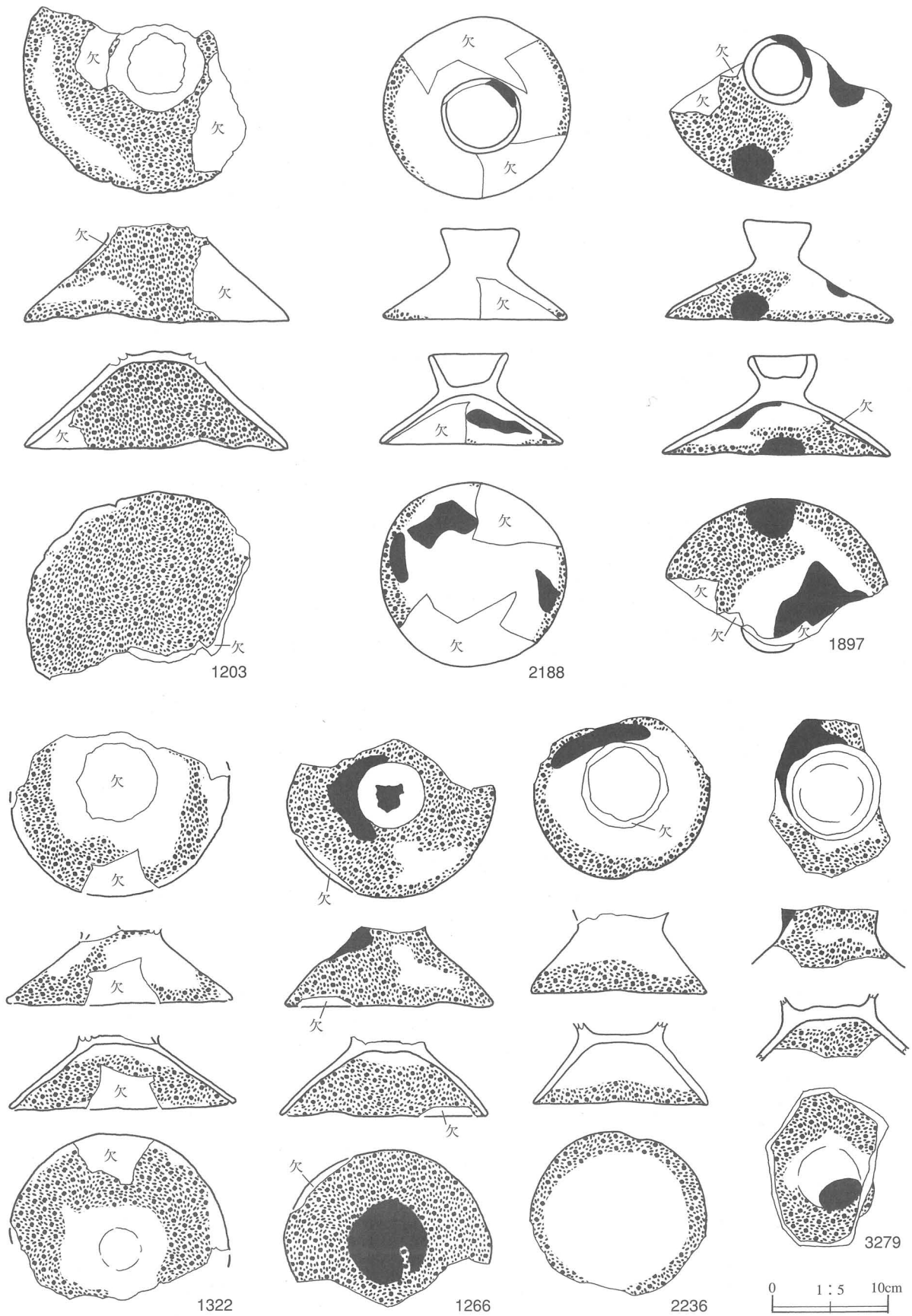
第 567 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (31)



第 568 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (32)

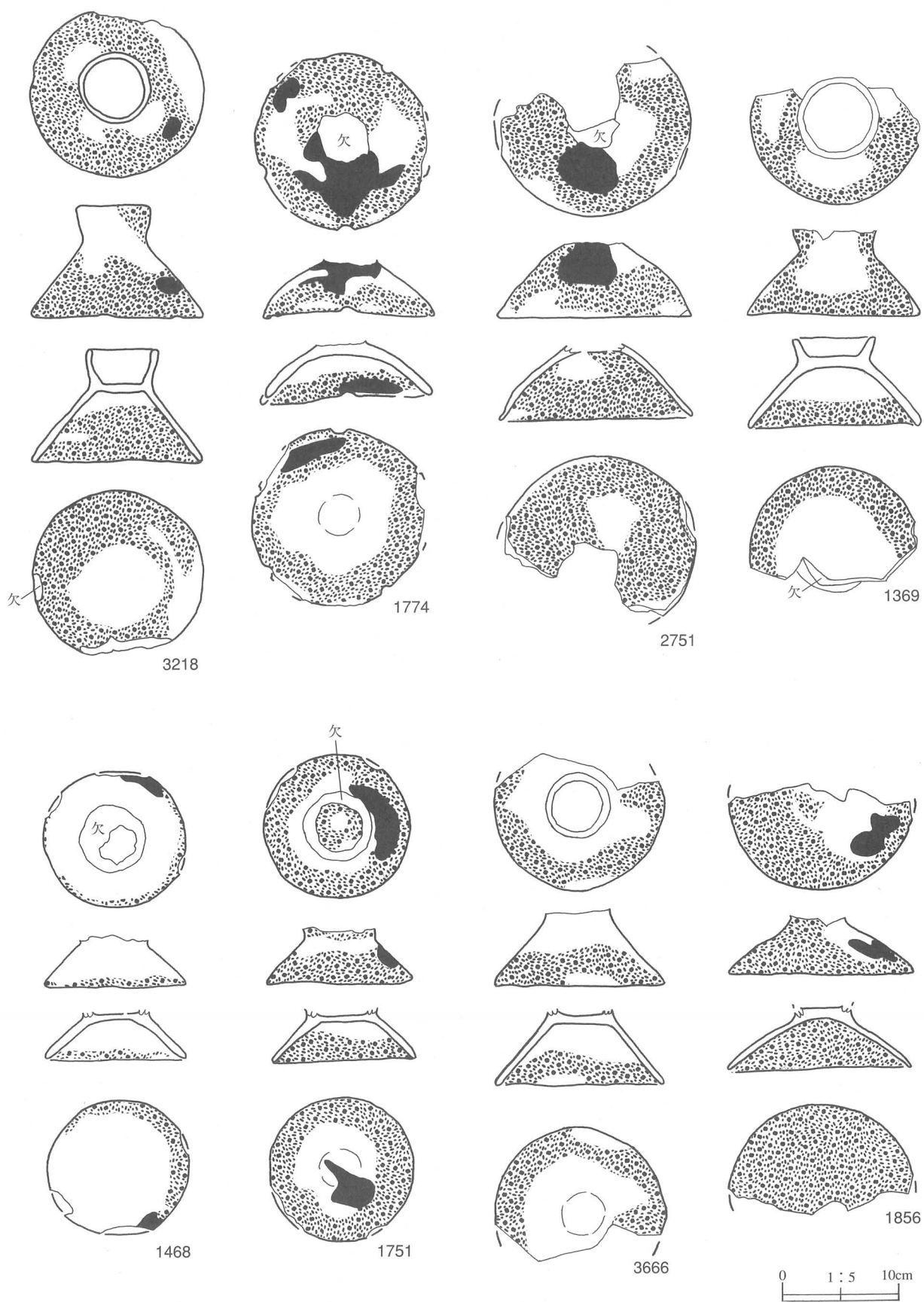


第 569 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (33)

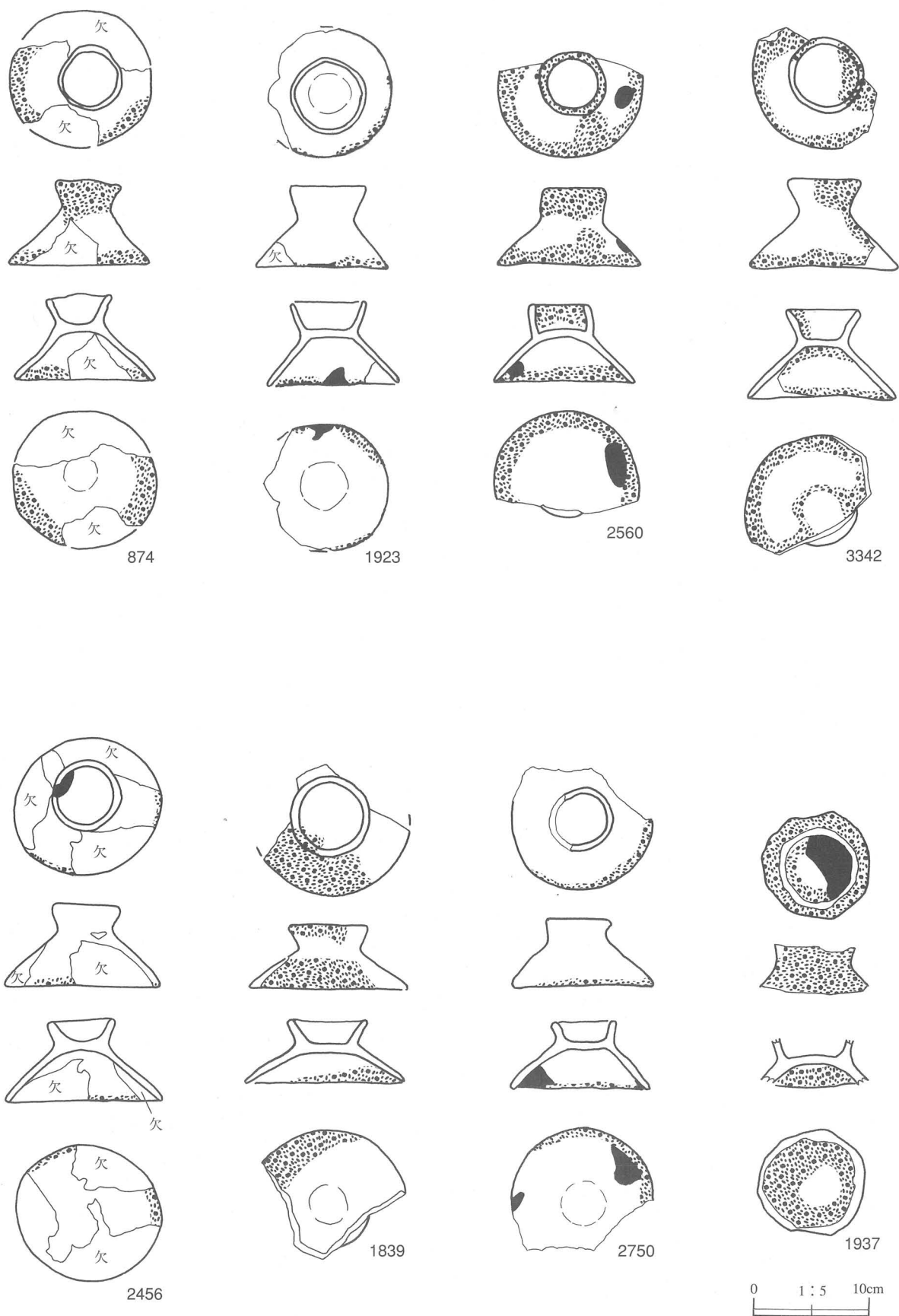


第 570 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (34)

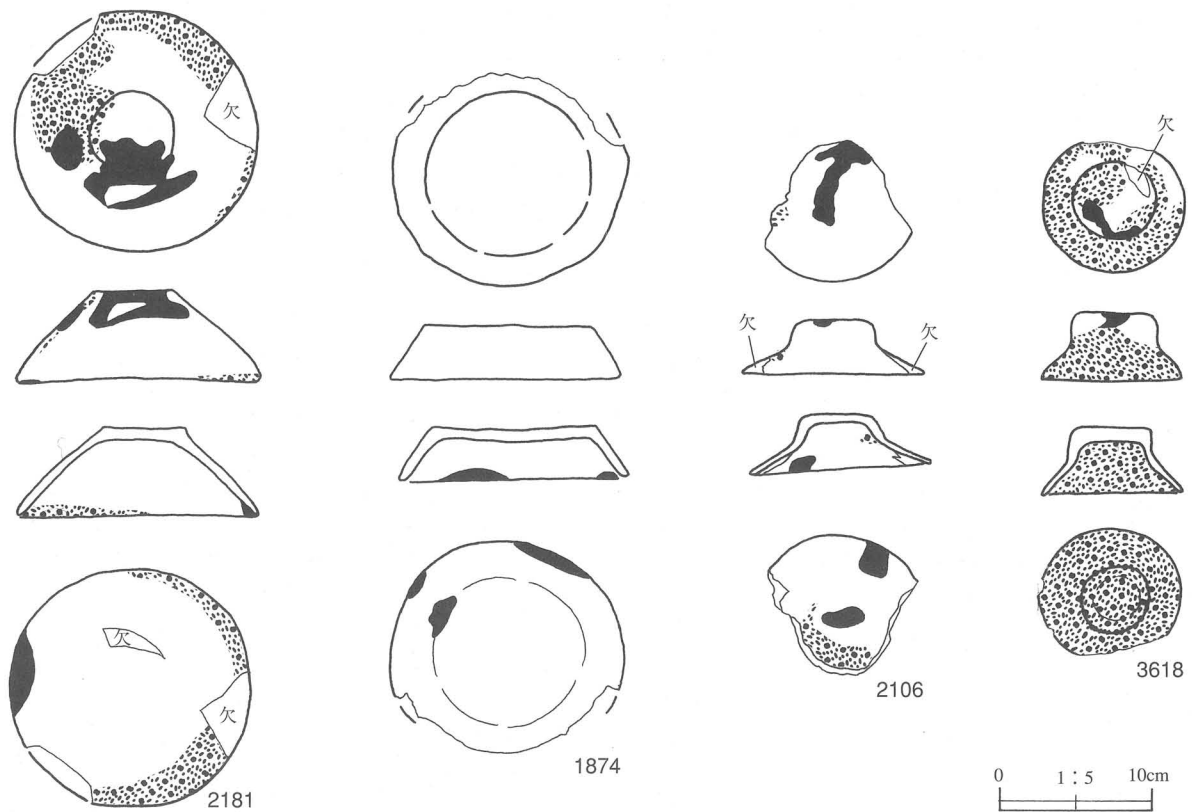
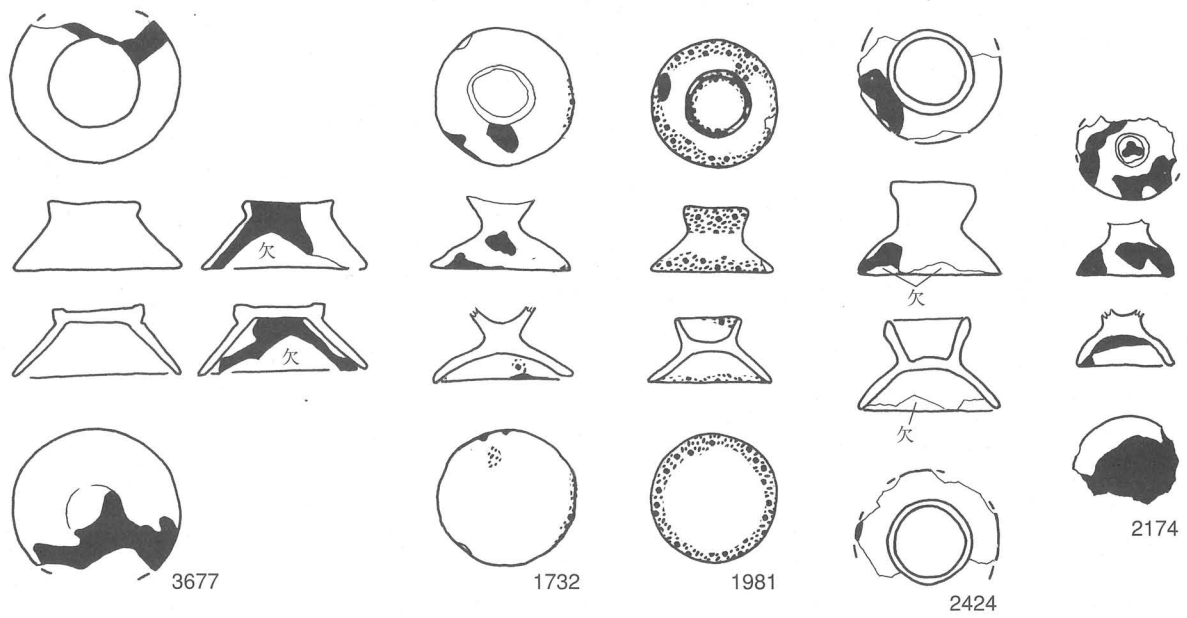




第 571 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (35)



第 572 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (36)



第 573 図 金附遺跡の黒斑・スス、コゲ痕 (37)